

島津忠久の生ひ立ち

——低等批評の一例——

朝 河 貫 一

小 引

もしかゝる輕易な小品をも世俗に従つて研究とか批評とか稱し得るならば、余は敢て之を低等批評の一演習と名づけたい。

史學批判における高等低等の別は人によつて標準を異にするであらう。余は他説に拘はらず、自分の経験のみによつて假に左の如く別ける。余の低等批評と稱するものは、(一)史的材料の文字の語る所を吟味して、(二)その示し得る史的事實を追究及び組織の對象とする。高等批評は(一)かゝる材料と其文言との出現を可能ならしめた背後の事情及び觀念を捉へて、(二)其處に無言のうちに存在し得る法制、社會、經濟、文化等の地盤を推究し、(三)此地盤の上に如何にして現在の材料の示す如き現象を生じ得たか、且つ如何にこの現象の發現がかの地盤に反動し得たかを考察する。低等批評の手續は一般史學研究法の大體教へる所であるが、高等批評の方法に至つては、之に加へて、その目的に應ずる特殊の手術と、久しい経験と、鍛鍊した理會力と、異常に廣汎且つ健全な比較的知見とを要すると思はれる。中にも比較的知識は、其多い程益々批評を深め且つ確める効ある故に、そ

の望ましい分量は限りがなく、その浅い人と深い人との研究の結果の差等も亦殆ど限りが無い。低等批評も亦目的と熟練と識見とによつて多少方法が分れることのあるは勿論ながら、此方法を行ふに必要な資格は自然に限度が定まつて居る故に、高等批評の要望する所とは廣狹、寛嚴同日の比でない。

もし上に立てた差別があまり抽象的で捕捉し難いならば、一の史家の實行した形跡を以て之を例證しよう。三世紀の後半に中世史研究の本鐸となつたので名高い佛國の *Fustel de Coulanges* は、余の的準を以てすれば、優越なる低等批評家の好標本であつたといひ得る。彼は從來の諸學說を其まゝに受容することなく、一々根本材料のみに據つて中世史の早い部分を其根柢から改造しようと企て、著しく成功して世を驚嘆せしめた大史家である。彼は史上の出来事よりもむしろ主として法制を闡明せんと試みたのであるが、惜いかな彼の時代には未だ中世法制史の學問が一般に今日のほどに發達して居らず、彼自身も亦之が専門的素養の殆ど無い人であつた。さすがに彼は一般の史的出来事を得るのみでは満足せず、その奥に横たはる社會及び國家の骨組みを知らうと志し、只々拉丁語原料のみを拉し來つて、鋭利な批評眼を以て之を分析し比較し、かくて史實と法制とを併せ獲ようとする、その結果能く在來の僻見を打破し幾多の新說を世に與へた。而して彼が研究の一慣用手段は、原料の中に在る重要な語句を抜き出して、此語が當代及び前代に如何なる意義に用ひられたかを成るべく豊富な原文に照らして精到に探究することにあつた。この驚くべき努力の成果が今猶我等を啓發する所が尠くない。しかし彼の此強所は同時に彼の弱所であつたと余は考へる。

抑も法制史の研究に當つて原料の討究の缺くべからざる所以は、單に其文言の示す所が大切なによるばかりでない。原料の語る如き行爲や事實の在り得たのは、之を然らしめた所以の背後の事情又は法制の在つた爲であ

る故に、個々の原料よりも、之を生み出ださしめた法制的地盤が更に重大で最も追究すべき所である。夫れ法制史學の原料として最も確、最も高價なるは、即ち記述的年代記や傳記など、いはゆる「記録」よりも、むしろ特殊の法的行爲を營む時に後日の憑據として之を記載した證文、いはゆる法的文書である。記録の類は多くは文書の傍に使用する時に最も効があり、文書の伴はない記録は容易に信用し難い場合が多い。しかし法的文書を法制研究の材料として用ひるにも頗る注意を要する。此等文書の常として、殆ど皆眼前の或る法的行爲を果たしたことを記載すれば足るものであるから、當事者は只當時慣用の法例に依つて此行爲を了したことだけを云ふのであつて、飽くまでも現代的、具體的のものであり、何等後世の研究者の便を計つて、此習法手續を來さしめた法制の原理を説明して置いたものでない。こゝに此等文書の貴重なる所以が存し、又こゝにその後世の學者のために甚だ不満足な所以が在るのである。其具體的特殊なことは我等をして之を基として輕忽に抽象的原則を立てることを躊躇せしめ、其一時的當座だけなことは法制の諸地域における差異と諸時期における變遷とを我等に窺はしめる効がある。されども他方には、當事者が只我が現前有限の目的を果す爲のみに、只當時周知の習法手段にのみ従つて行つたことを、普通の文式のみによつて記載したに過ぎない故に、其作製した文書は、彼等の用いた習法が一般の法制史の中に如何なる地位、如何なる意義と關係とを有したかといふ如き深い問題には、何等の關心なく、多くは其見識もなく、又之を語る必要も無かつた。故に補任、安堵、不入、免除、從屬、宛行、寄進、土地賣買、其他の無數の法的取引文書は、皆特殊なもののみであつて、之が根本の地盤たる當代の廣い法制系統に至つては、嘗て之を語らず、只その一小部分を無意識に暗示することがあるのみである。まして他人の行爲を語る記述編年史や傳記に至つては、殆ど皆法制的興味を持たぬ人々の記録である故に、文書の特殊的長所だ

けだに備へない。されば文書及び記録を悉く檢査して根氣よく習法分子を此中から拾ひ出して之を維ぎ合はせても、肝心の一般的法制體系は猶ほ過半暗黒裡に残る。フュスナルのやうに重要な用語を理會せんとする試みは勿論最も必要であるが、之だけで材料批評の能事が畢つたのではなく、語義を確めることよりは其後猶ほ研探すべきことの量が遙に多い。法制史のみならず、經濟史、宗教史、文化史などの研究も亦之に類する。只法制史の探考は最も深刻な集約的思考 intensive analysis を要する一つであると思はれる。

されば低等批評の終つた處から高等批評を踏み出すべき筈である。高等批評、殊にその法制史に關するもの、如きにおいては、材料を遍く集めて理會することに較べれば、之について考へることに要する時間と努力とが數倍であるを常とする。努力の消費と成果の分量との比例は、事實記述と法制論著との間に莫大の差が在る。余が日常企てゝ居ることは彼ではなく是である故に、今こゝに試みた小論の如きは稀に爲す所、平日の業に比して恥づべき輕微な作品と思ふ所である。又慣れぬ試みとして、定めて缺陷が多であらうことを疑はない。

凡例とでも云ふべき一二の點が在る。引用の材料は多くは世にありふれたものである故に、且つは文を過長ならしめないために、事々しく書目解題を掲げることが省く。寫本として世に多からぬ地方諸家の系譜や記録なども用ひたが、是等は『薩藩舊記』などの外は多くは短小な物である。

紀年は故さらに元號を避けて西曆によつて通算した。但し讀者が之を年號に還元せんとせられる時の便を計つて、西曆ながらも、日本の太陰曆を用ひ、兩種の太陽曆に換算することを避けた。西曆は或は讀者に不便もあらうが、又便利な點もあることを認められるであらうと考へる。又もし皇曆を用ひなかつたのを咎める人があらば、余は敢て答へていはう、それは余が西洋の讀者に對する時の便利の爲に外ならぬこと、たとへば軍人が甲冑や槍

薙刀を用ひず軍服銃器や飛行機を使ふの類であると。或は之がために軍人と余とに愛國心が乏しいといひかける低等批評家もあらう。

目 次

忠久誕生の年

丹後内侍——比企氏であつたか、忠久の母であつたか。

丹後局と丹後内侍

惟宗廣言——廣言と忠久、傳説の由來、傳説の活力。

源賴朝、畠山重忠、近衛基通——賴朝傳説の漸成、此説を疑ふもの、改めるもの。

政子の嫉妬、重忠との關係、基通との關係、基通に重用された理、

賴朝に重用された理、賴朝傳説の動機。

高倉宮以仁王——説の根據、説の影響と責任。

結論——傳説の地盤、傳説の四體系四時階、近世改造の例、諸點の史値の評價、

史學的價値と現實、史學的改造。

島津忠久の出自について島津家が古來唱へた所は追々と變移したのであるが、忠久の母が丹後局と

いふ人で、局は比企氏であるといふ點は前後變つたことがない。然るに忠久の父については、惟宗廣言だといったことも、源頼朝だといったこともある。頼朝を語るものは、畠山重忠をして此子を元服せしめ、これによつて忠久の名が興へられたといひ、間もなく頼朝が忠久を島津庄地頭、薩隅日三國の守護に補任したといった。また薩藩には忠久が以仁王の落胤だといった者もあり、しかしその場合の母が同様に丹後内侍だと明言したのは一八六五年伊地知季安の説のみであるらしい。それはともかくも、藩の傳説の前後の矛盾は此外にも少からず存在し、その前後相合する諸點の中にも之を證すべき確實の史料の無いものがある。又その外にも多くの問題を提供する。松下重資氏は其著『郷土史大系』の第三卷に忠久問題に五十八頁を費されたが、余の妄評を以てすれば、常に疑問を解決されないのみならず、却つて解決から一層に遠ざけられた點もある。

この紛糾した問題の諸部を吟味する前に、先づ第一にその傳説の多くの困難の一大原因を作す忠久誕生の年に關する説を評量するの要がある。

忠久誕生の年

島津家傳は皆一様に忠久は一一七九年の大晦日に生れたと唱へる。此點と、忠久の母が丹後局であ

るといふ點とは、他の諸點の相異に反して、傳説の一致する所である。此説の由來は未だ稽へ得ない。さて忠久の歿年については『東鑑脱漏』には一二二七年六月十八日とし、藩の傳説も多くは之と同じく、其前年三月説は勢力が少い。さらば年齢は四十九歳であるべき筈であり、又傳説も大抵その通りであるが、稀には六十歳と稱したものもあるらしく、『新編相模風土記』にもさういつてある。是れ一方新井白石が『藩翰譜』で四十九歳の方が正しからうといった所以であり、又他方一八六五年季安が以仁王落胤説を調査する際に忠久は一八六七年に生れたといった理由であらう。(もし季安が忠久の歿年を一二二六年とする或説に據つたと假定すれば、之より六十年を逆算して一一六七年を得たのでもあらうか)。

然るに第十五世紀後半の『山田聖榮自記』には一一八九年頼朝は奥州征伐に發途する時に重忠をして十三歳の忠久を元服せしめたといふ。さすれば忠久の生年は一一七七年となる筈である。然るに聖榮は一一六三年の誕生といったこともあるらしい(松下三三三)。

『除目大成抄』には忠久が一一五五年頼長の推舉で播磨少掾となつたといつてある。もし此時二十歳頃とすれば一一三六年頃の誕生となる。これは前後の事情から推して過早と思はれる。

『玉葉』には一一八〇年五月六日右近衛眞手結の密々見物を記する條に、出事前駈侍の中に左兵衛尉忠久を擧げる。これが同人ならば、其時に忠久を十八歳程の壯年としても、聖榮の一説と同じく一

一六三年の誕生となる。『新後撰集』一七に忠久の子忠綱の子と思はれる惟宗忠景の歌の序に賀茂の社で祖父の忠久が檢非違使にて祭主であつたことを偲ぶと書いてある。是れ『鎮西藩史』にも忠久を賀茂祭主といふ所以であらう。これは明かに忠久が猶ほ頼朝に仕へずに在京した時のこととなければならぬ。藩の傳説が忠久は一一七九年に生れ一一八五年七歳の時頼朝に謁して云々といふ所と、右の事實とは矛盾する。七歳以前に檢非違使や左兵衛尉となり得る筈がない。

藩が一一七九年誕生説を固持した爲に辻褄の合はないことが無數に生じた。聖榮の一一八九年十三歳元服の説は恕すべしとしても、藩がその四年前七歳で元服したといふのみならず、其日に頼朝が忠久を右兵衛少尉とし伊勢二箇處の地頭としたといふのは奇怪である。頼朝は尉官を任ずる權を持たない。猶ほ島津家には此頃の下文といふ數通の文書を掲げる。同年八月十七日には忠久を領家の狀に任せて島津庄の下司職とした頼朝の下文があり(吉見系圖では此下文を誤つて此日に忠久が三國守護となつたといつて居る)、翌年正月八日の下文は忠久を信濃一處の地頭とし、四月三日下文には彼を島津庄地頭と稱し、翌年九月九日下文は彼を庄目代と呼び、庄の押領使に任ずるやうに見える。遙に後代一三六二年の貞久の文書には、右の下文によつて忠久が三國守護となつたと見え、一庄の使を三州の守護に轉化した。此一一八五年から一一八七年までの文書と忠久一一七九年誕生説とを信ずるならば、七歳から九歳の間に諸處の地頭とされ、大庄島津の目代や押領使となり、且つその或文書及び聖榮の

いはゆる頑強の武人多く極めて難治の遠國の鎮撫をこの愛兒に委任したこととなる。

恐らくは忠久の歿年を一二二七年とする説は生年を一一七九年とする説よりも確かであらう。少くとも『東鑑』には一二二四年十月十六日まで忠久の名が見える。之と『玉葉』に一一八〇年彼が兵衛尉であつた記事とを併せ考へて、その誕生を大略一一六五年頃又はやゝその前と見ることが妥當と思はれる。一一六三年誕生の説や、歿年六十歳の説も、かやうな根據があつた故かも知れない。さすれば元服を一一八五年とする傳説は遲きに失するが、三國の一一九七年の『岡田帳』に既に忠久が島津庄過半の地頭であり、『東鑑』に一二〇三年に既に三國守護であつたといふ確固たる事實が難なく理會される。故に余は更に有力な文證を得るまでは一一七九年誕生説を排して一一六五年以前と推定し、聖榮の一説に傾く。

丹後 内侍

薩州の傳説には忠久の母を丹後「局」とし、局は比企能員の妹であるといひ、又は姉といひ、又は姪なるを妹としたといふ。(松下一四に姪云々の説の出所が不明だとあるが、多分『東鑑』一一八二年十月十七日條の比企尼が能員の嬢母であつたといふ記事からの誤れる推論によつたのであらう。後段に論ずる如く、傳説の局は内侍のことである。

然るに『東鑑』には比企家とその縁戚の諸家との記事が頗る多いに拘はらず、丹後内侍について記する所は下の二件のみである。(一)一一八六年六月十日頼朝は病める内侍の甘繩の家を、従者僅か二人を連れて、「潜に」訪ひ、同じく十四日には日來の内侍の病について立願した頼朝が、その平癒によつて今日聊か安堵した。(二)遙に後一二四八年五月十八日秋田城介景盛が歿した時の記に「藤九郎盛長男、母丹後内侍」とある。この二つの條項は後に更めて論ずるであらうが、先づ既に注目すべきことは、丹後内侍が安達盛長の妻であつたことは明かであるが、内侍が比企氏であることも、忠久の母であることも、まして頼朝の愛女であり彼の微行が政子の妬心を憚ることも、現はれて居らぬことである。

又内侍を局と呼んで居ない。但し局といふ詞は、高下を問はず部屋を持つて居る宮女房の總名であり得たと思はれるから、内侍をも亦京でも鎌倉でも局と呼んだことは在り得べきことである。鎌倉に仕へるものさへ局といはれるものが『東鑑』に多數見える。比企朝宗の妻は政子の「官女」で「號越後局」(一一八八年正月二十二日)。河野上總介の妻阿波局は頼朝の子千幡の乳付であり(一九二年八月九日)、其外大貳局、大進局、上野局、下總局などあり。比企能員の女は頼家の妻、元は若狹局とあり(一二〇三年九月二日)、實朝の御台所女房丹後局が京より着いたといふ記事もある(一二一〇年六月十二日、勿論これは丹後内侍とは別人である)。此等の中には嘗て京に宮仕したために局號を保つたもの

もあらう。或は又鎌倉でも京に擬してかやうな稱號を作つたかも知れぬ。頼朝以後京との關係が加はり、又頼朝の官位が次第に上つたことを考へれば、右の二様の事が可能と思はれる。とにかく、さすがに鎌倉の「官女」には局といふものが多くても内侍といふものはない。内侍は丹後のみで、彼女は一一八六年に頼朝や政子に侍仕して居たのではない。此人のみを内侍と號して局と書き別けてあるを見れば、丹後内侍を當時丹後局とも稱したことは疑ふべき餘地がある。

丹後内侍は比企氏であるか——『東鑑』にはさういつて居ない。此點と之に連る諸點とを最も詳しく語るものは、島津家記録よりもむしろ吉見家系圖である。これに據れば比企掃部介と妻(比企禪尼、頼朝の乳母)とに三女があつた。長女は丹後内侍で、二條院に仕へる間に惟宗廣言と通じて忠久を生み、關東に還つて安達盛長に嫁し、その女子が後に範頼の妻となつた。尼の次女は河越重頼に嫁して、其女子が義經に嫁した。尼の第三女は先づ伊東祐清、次に頼朝の一門平賀義信に嫁し、その腹の子が北條時政の婢となつた朝雅である。禪尼は三嬖をして伊豆の頼朝に侍せしめた。比企家系圖は尼の三女とその夫については吉見系と同じいが、之とは違つて丹後内侍と惟宗廣言との生んだ女子が頼朝の妾だといつて居る。但し忠久が此女子と頼朝との間に生れた(即ち忠久は丹後内侍の孫だ)とはいつて居らぬやうである(松下二〇、二一参考)。

比企系は吉見系よりは遅いものかとも考へられる。比企系が頼朝の妾が内侍でなく其女子であると

いふのは、(後節にいふ如く) 吉見系に見える一句を誤解したのでなくば、吉見系の説が年時の上から見て不都合と思つて之を改めたのかも知れない。而して年代の不都合を感じたとすれば、幾分か他の記録など、古説とを比較した結果であらう。元來(後にいふやうに)比企家の出處は不詳に屬する。是亦其系の比較的新しい傍證だと見得る。恐らく比企系は吉見系を一材料として編したのであらう。果して然らば今日のところでは忠久前後の比企氏の婚姻關係については吉見系圖が最も大切な材料である。

さらば吉見系圖の史學的價值は如何。是は武藏の吉見家が範賴と安達盛長と丹後内侍との女子とを先祖とすることを示す綿密な系譜である。系の記事は一五五六年頃までに及んで居るが、其最初から頗る詳しいのを見て、早い方も何か古い記録に據つたのであらうと考へられる。始祖を範賴とすることは第十四世紀後半の著を後まで追加した『尊卑分脈』一〇にも合するが、此書と吉見系とが共に同じ材料を用ひたか、はた原料記録が相異なれば其間の先後は如何、知る由もない。『東鑑』一一八七年十月十三日には吉見頼綱なるものが見えるが、吉見系には見えない。系によれば範賴の長子の生れたのが此年に當る故に、或は頼綱は實子なく範賴の子又は範賴自身を養子としたのかと疑はれる。さすれば吉見家は更に古いものであつて、此系は範賴の新血を入れた時から書き起したものである。(太田氏の『姓氏家大辭典』三を檢すればヨシミの地名は武藏のみならず美濃、近江、遠江、和泉、丹波、長門等に

も在り、之を姓とするものに百濟族、菅原氏などいふものがある。而も範賴と結んだのは武藏の吉見で、頼綱も亦伊勢にも領地があつても武藏の吉見庄に本領があつたのであらうか。とにかく此家の起原は不明である。もし頼綱の養子となつたものが範賴自身ならば、入贅ではなく内侍の女子たる妻を携へて入つたのであらうか、もし入贅ならば範賴は二度婚したことになる、内侍の女子を後妻と見ずば其二子に關する吉見系の記事と調和し得ない。之に反して範賴が吉見を始としたことがない事實から推して只彼の子が頼綱に養はれたとすれば、三子共に養はれたこととせねばならぬ。又もし一切の養子説を斥けるならば、同時に吉見家が二つあつて何れも頼の字を名としたこととなり、如何に二家の間の本支關係を定むべきかに迷ふ。次に範賴が盛長と内侍との女子を妻としたことと完全に確實だといはれない。吉見系は之を根本とし、一一九三年範賴亡びて後、その六歳の長子は誅されたが、内侍と母尼とが哀訴して二子三子は助命されたといふ。『尊卑分脈』が範圓が範賴と盛長女との子だといつても盛長女の母が内侍であることをいはないのは、此書の記入法式上母方を成るべく省いたためである。只盛長が内侍の夫であることが『東鑑』で證される以上は、範賴の妻といはれる盛長女が内侍女なることが眞實であるかも知れぬが、是は單に吉見系と尊卑分脈との相合する點を基とする推論であつて、充分に證されたのではない。『東鑑』には義經の舅河越重賴と重賴の婢下河邊政義とが義經に縁坐したことが見えるが、範賴の舅盛長が範賴に縁坐して居らぬ。但し是は重賴等が特に義經に與同

した故かも知れぬが、とにかく範頼の妻が内侍の女であることは、内侍が盛長の妻であること、其子が景盛であること、及び義経の妻が重頼の女であることほどの確實性を缺く。従つて内侍と忠久との母子關係の吉見系説も信憑すべきや否やに惑はざるを得ない。

幸にも比企家の婚姻關係については『東鑑』に上に見えたことの外にも多少吉見系と照合し得べき記事が在る。一一八二年八月十二日條に重頼の妻を「比企女」、八四年九月十四日條には頼朝の許によつて重頼の女を義経に嫁すべく上洛せしむとあり、(平家物語一八及び源平盛衰記二六と四四とには其後義経は平時忠の女を愛したが、「もとのうへ」重頼女を「尋常にしつらへてもてなされけり」といひ)、八五年八月二十三日及び十一月十二日條には河越一門の人々が義経に連累してそれぞれ罰せられたことが見え、八七年十月五日條には重頼は既に誅されたが彼の領した河越庄は後家に賜ふとある。(誅された時の記事は無い)。之によつて見れば重頼の女が義経の妻となつたことは證されるけれども、重頼の妻は比企の誰かの女であることが明かであるのみで、比企尼の女であるとは直接には云へない。しかし事實かも知れない。又伊東祐清の妻が夫の死後平賀義信に嫁いだことも見えるが(一一九三年六月一日、七月二日)、それが比企尼の女であることは同じく記されない。『大日本古文書』の平賀家文書にも此時代のもの無く、何等憑證すべきものがない。次に丹後内侍が安達盛長の妻であることは前にいつた如く明かな事であり、一一八六年頼朝の訪うた内侍の住處甘繩は即ち盛長父子の住宅である(甘繩

には伊勢別宮が在つて頼朝政子が時々參詣し、其時に盛長の家に留つたことも一一八六年正月二日、九四年正月四日、九月二十一日、其外度々見える)。只惜むべし内侍が比企尼の女であることの見えないのは重頼、義信の妻と同じである。僅に此書によつて頼朝が、彼の敬遠した北條家にもまして、比企安達兩家に特別に親しかつた有様の頗る相似て居るのを見て、兩家の相連關係を推察し得るに過ぎない。

一應頼朝と比企家との親密の次第を『東鑑』に尋ねれば下の如くである。一一八〇年六月十九日條に在京の三善康信の母は比企尼の妹であつて、康信は毎月三回京の事情を頼朝に報じたとある。此人は後に鎌倉に來り仕へて信用された人である。一一八二年十月十七日條によれば尼はもと頼朝の乳母で、一一六〇年頼朝が伊豆に流された時に比企家は比企郡を請所とし、尼は夫婦部允と共に下向して、一一八〇年まで二十年間頼朝の世途を訪ふた。この故に尼は甥能員を舉申して今日彼は若君(頼家)の乳母夫とされた。その前此若君を産む際には政子は比企谷殿に行つて七月十二日から十月十七日まで滞留した。八月十二日には比企女である河超重頼妻を乳付とした。一一八六年六月十六日、八七年九月九日には頼朝政子と共に尼の家に遊樂し、九〇年正月三日には頼朝は御行始として能員を訪ひ、九五年七月九日には政子が訪ひ、頼家は九九年十一月十八、十九日、一二〇二年三月八日之を訪ふた。一一八九年奥州征伐の北陸大將軍は能員と宇佐美實政であつて、十八日能員先づ出發して後、十九日頼朝が出馬した。一一九五年二月十四日頼朝再度の上洛にも、先づ十二日に能員等を發途せしめた。比

企朝宗の女は、九二年十月二十五日條に姫前といふ幕府官女で「當時權威無双之女房」であるのを、江間殿が慕ふによつて、頼朝は彼に嫁がしめ、永久離さないといふ誓文を彼から取らしめた。義經、範頼の事件があつても、彼等と戚縁ある比企一族は何等の不興を示されないのみならず、頼朝在世の間は將軍家との關係が此上もなく懇篤であつたと思はれる。能員一家の失落は頼家に至つてから一二〇三年に起つたことで、それは北條氏に對する陰謀の爲である。

次に頼朝と安達家との親交を顧みよう。安達盛長は伊豆以來侍仕した特別の忠従で、一一八〇年頼朝が以仁王の密旨を受けて六月二十四日累代御家人等を招く書狀を配付する時に盛長が其本使の役を勤めたのを始めとして、鎌倉に来てからも盛長の忠勤は度々特記されてある。且つ頼朝は比企家を除いては誰にも優つて安達家と特別の親交を保ち、加之その親交の表現は甚だ比企家に對するものと似て居る。いはゆる御行始に一一八〇年十二月二十日、八二年正月三日に盛長の家に行つた外に、同家を訪ひ時として宿つたことが九一年六月十八日、九四年正月八日、九月二十一日、十二月一日、九五年正月四日、十二月二十二日、其他に見える。頼朝の死後、例の頼家が盛長の子景盛の愛女を奪はうとして九九年八月十九日兵士を遣はして其家を攻めんとした時の如きは、母政子自ら安達家に行つて之を妨止し諫言した。その諫詞の中には「就中景盛有其寄、先人(頼朝)殊令憐愍給」といつてある。實に頼朝の時には盛長は度々使命を承はり、九四年十二月一日には「上總國中寺社一向可管領」との恩命があ

り、頼家の代となつてからも九九年後半には、盛長は前から三河國を奉行して居た守護であつた。この外にも盛長のことは度々記載されてある。但し盛長の名は一一八九年六月九日、七月十九日の征奥の經軍交名の中に見えず(口八月十八日及び二十四日)四人を預かつて下向しかつた(九〇年十一月七日九五年三月九日、頼朝兩度上洛の供衆人交名にも見えない。老年の故であらうか、又は彼の勤務が武事よりもむしろ侍仕的であつた爲であらうか。系圖には安達家は藤原氏と稱し、『東鑑』には之と書き別ける足立家と同氏としてあるが、太田氏は藤氏は假冒で實は双方共に武藏國造の後であらうといはれる。とにかく安達家は武藏の出で、同國出自の比企家と同じく、少くとも一時は京紳との關係があり、純粹の武族ではなかつたものとも想はれる。盛長の子景盛の事は頼家以後に属するから今尋ねるに及ばない。(此景盛は即ち一二一八年以後出羽權介として從來中絶した秋田城介の號を得て之を子孫に傳へた人である。只一言附加したいことは、比企能員が一二〇三年北條氏を謀つて一族滅亡したに拘はらず、安達家が縁坐した形跡のないことである。之に反して島津忠久は南三州守護職を收公されたと九月四日條に記される。

以上頼朝と比企安達二家とが格別に親しかつた事實と有様とから推考すれば、兩氏間の姻戚關係の傳説に根據があるかも知れない。頼朝が内侍の病を立願するまでに心配したのも内侍が比企女で兩家を維く鎖であつた故かと察し得る。更に一步を進めて考へれば、河越重頼が義經の舅として誅され(下

河邊政義が單に重頼の婢なるが故に所領を沒收され、忠久が能員の縁坐で職を奪はれたに反して、安達家が能員に連累したと見えないことは、恐らく盛長と能員との相縁が重頼と義經との間よりは遠く、忠久と能員との間よりさへも遠かつた故かと推し得る。前者については、吉見系圖に義經は重頼の婢なれども、盛長の妻は比企尼の女ながらも能員は尼の甥であつたといふことが、無理を生じない。之に反して同系圖に忠久が内侍の子とあるに従へば、忠久と能員との間は盛長と能員との間よりも甚だ近いといふことが出来ない。盛長が縁坐されず忠久が縁坐されたことを見れば、忠久は内侍の子たるよりも（もしくは子たるに加へて）一層能員自身に近い縁があつたのでなからうかと疑ふ餘地がある。されば『東鑑』と比考すれば、吉見系圖が重頼、義經と比企家との關係を語る所よりも、同家と盛長との關係を言ふ所は傍證を缺き、殊に忠久と同家との關係の説に至りては信すべき程度が劣りもしくは語りて詳ならざるものがあると思はれる。

こゝに起り得べき問題は、如何なる次第で比企の一女が京都に宮仕して内侍とまでなり得たかといふことである。抑々王朝末期の内侍は后宮の内侍司の中の掌侍であつて、此司の本務である供奉、奏請傳宣、禁中禮式等を掌る重職で、その第一女である勾當内侍は直接に勅を藏人頭に仰せて内侍宣を發せしめたのである。武藏の一郡領の女子が如何して掌侍の一人たる地位に上り得たかを怪ましめる。元來比企家は藤原氏だといふ説もあるが、其祖先は『大日本史』も注意した如く不明に屬する。

尼の夫婦部允が比企郡大領であつたといふことは、其先代が京から下つた人、もしくは京紳と縁故のある人であつたことを暗示するものであるまいか。尼の甥能員も出自不明である。其名及び事歴から考へれば彼の生立ちは一介の關東武人でないやうにも思はれる。尼の妹が在京の三善康信の妻であつたことも忘れ難い。旁々以て尼の長女が宮仕したのは京に連絡があつた爲と信じ得る。吉見系にも薩州の記にも内侍が無双の歌人であつたといつて居る。實に『賴政卿集』春部に「かへし丹後内侍」とある歌を二條院に侍して南殿の櫻を觀た時のものとしてあることは、正しく吉見系に内侍が二條院に仕へたといふに合する。和歌の名人ならば單純の東國田舎娘ではなく或は比企の家庭に京文化の傳を保ち或は内侍が京の或家に養育されたものと想像し得る。次に『東鑑』一二〇三年九月二日條には頼家の愛妾は能員の息女で若公（一幡）の母であり「元若狹局」であつたとある。此書には（前述の如く）幕府に仕へる女房をも何々局といふことが多いが、若狹局の「元」の字は、現在に頼家に仕へる女の事ゆゑ、もと京に宮仕したことを言ふのかとも考へられる。

以上比企女の關係の所得を括れば下のやうな結果となるらしい。河越重頼が義經の舅であることは吉見系の説を『東鑑』が立證する。「比企女」といふ重頼妻が尼の一女であることは當代の直接の證を缺く。内侍と盛長との女子が範頼に嫁したことは『東鑑』に明言なく盛長が範頼に縁坐した事實も見えないが、少くとも此女の父が盛長であつただけは『尊卑分脈』にも見える。此等の點よりも忠久

出自について大切な内侍盛長夫妻關係は、正しく『東鑑』に明示する所であるが、只内侍が比企尼の長女であるといふ肝心の一點は、只々盛長と比企家とが同じ有様に他家の上に秀でて頼朝に親信された事實からのみ推して或は然らんといひ得るに過ぎない。

中心の疑問は勿論内侍が忠久の母なりや否やにある。此點は島津家が忠久の父について説を度々變へたに拘はらず始終主張し來つた所である。此點は父の誰であるかを吟味せねば充分に論じ得ないが、内侍を母とすることのみについても少しは言ひ得べきことが在る。

内侍は忠久の母であつたか——此論を左の數點に分説しよう。(一)忠久と比企家との所縁の性質。忠久が同家と何かの縁のあつたことは『東鑑』一二〇三年九月四日の「能員縁坐による」守護職收公の記事で明白である。忠久の弟といはれる忠季も亦同年に若狹の領を沒收されて其が一時他人に宛行はれたことが『若狹國守護職次第』に見えるのも有力の傍證である。而しそれは忠久が内侍の子であつた故であらうか。もし吉見系にいふ如く、忠久の母且つ盛長の妻たる内侍が能員の實妹でないならば、何故忠久が能員に縁坐され盛長が縁坐されなかつたかを怪み得る。前に重頼の女を妻とした義經の縁坐によつて重頼が誅されたことを參考すれば、忠久と能員との縁は單に忠久が能員の義姉妹の子であるよりも能員に一層近密であり、重頼と義經との間ほどの近さがあつたのではなかつた、重頼が誅され忠久が只職を奪はれたといふ差異は甲が犯人に與同し乙が遠國に在つて謀叛に無關係であつた

爲ではないか、と問ひ得る。忠久はむしろ能員自身と個人的に因縁があつたのでないか。能員の實女又は實妹を妻としたのではなかつたか。『東鑑』の九月二日即ち能員滅亡の當日には、彼の息女若狹局の外に、舅、猶子一人、甥三人を記し、翌日條には妻妾並二歳男子のことがあつた。忠久の名は甥の中に見えず、妹甥とも書いて居ないけれども、右の三甥は攻寄せた討兵と防戦して討死した者として擧げたものであつて、能員の甥が是のみだとは斷じ難い。とにかくに忠久が能員個人と近縁らしいといふ點は島津家の根源の傳説に逸する重要な想像であるまいか。かくて忠久は能員女を妾として一幡を生んだ頼家と連關することとなる。たとへ忠久が頼朝の私生兒であるといふ説を疑つても、將軍家との關係が頼家に至つて新に生じたと思ひ得ないこともない。勿論忠久が同時に能員個人と近縁で兼ねて内侍の子でもあり得る道理である。此點は如何。

(二)當代記録の沈黙。比企家の事を頻りに記入した『東鑑』は忠久が内侍の子であることは一言もいはぬ。實に此書は一二〇〇年以前は内侍についても比企家及び盛長についても頼朝及び政子についても又忠久單獨としても一度も忠久の名だに語らない。一二〇〇年二月二十六日始めて頼家に至つて其鶴岡社參の御後衆二十人の中に島津左衛門尉忠久が現はれる。(その官號は『三長記』一一九八年正月末日の除目交名によつて正確なことが證明される)。此後は忠久及び島津家の人々の名が時々見える。もし果して忠久が頼朝と特別に親しい比企安達兩家の重要人物丹後内侍の子ならば、何故に其事

實が見えず、忠久の名だに久しく黙されたのであらうか。たとひ遠國に住んだとしても、京の大番役と鎌倉への時々の出仕とがあつた筈であり、何かの機會に記録されさうなものだと思はれる。もし他の傳説の如く忠久を頼朝の私生兒と見れば此沈黙の理由が愈々不可解となる。島津記録には忠久は一八五年頼朝に見參して重忠から元服され、一二年内に伊勢、島津庄、信濃に地頭職を與へられ、間もなく三國守護に補任され、或は一八九年の征奥軍の一將とされたといつて居るが『東鑑』には右の如く一二〇〇年までは忠久は毫も記入されない。勿論同書は補任等について脱漏が頗る多いが、少くとも鶴岡見參の事、殊に征奥従軍交名の二個の目録の中に記載さるべき筈であり、内侍の子であることも何處かに出現しさうなものと考へられる。固より所謂 *argumentum ex silentio* は史學の禁物であり、無言は否定でないにもせよ、重事に注意深き『東鑑』の無言は細事の沈黙と同等視し難い。敢て否定せずとも疑ふだけはむしろ史家の義務である。また忠久死後四五十年頃に其孫久時と市來政家との系圖相論のあつたことを『酒匂安國寺申狀』に記してあるが、(後にいふ如く) 其時に久時は忠久が惟宗廣言の子であると主張したが、廣言と内侍との間に生れたと言つたのでないらしい。此書は第十五世紀前半の記であるが、もし其第十三世紀後半における相論の記事が正しいならば、此處にも沈黙は疑惑を催す。(惟宗關係は後節に論ずる)。

(三) 年齢上の齟齬。内侍の年配は忠久の母として妥當か否かを一考しよう。忠久の生れた年が一七九九年よりは一一六五年以前とする方が事實に近からうことは既に推論した。内侍の年については余の見た三個の説がある。甲、『西藩野史』に引く一説より算すれば、「局」は一二三四年頃に生れ、二十五歳で宮仕し、一二一五年八十二歳で歿した(一一三四—一二一五)。栗原信充が史局で調べた結果も同年八月十九日同齡で死したといはれる(松下五三)。乙、藩記録には又一二二七年十一月十二日歿といふものがある(同五五)。一八六五年伊地知季安が久光の命令で以仁王落胤説を調べた時の報告には局は一一四六年に生れたとある(同三三)。之を一二二七年の死に照せば八十二歳の齡は甲説と同じく只生死が各十二年だけ後れる(一一四六—一二二七)。(但し季安の擧げる局の履歷から推算すれば、その生年はむしろ一一四五年となる様である)。丙、一八六九年に鈴木真年が編した『華族諸家傳』(松下六四)には一二一四年十月十三日五十二歳で死んだとあるさうである。何の根據があるか分らぬ(一一六三—一一二四)。

三説によつて忠久の生年たる(イ)一一六五年又は(ロ)一一七九年における内侍の年齢を算出すれば下の如くである。甲説には(イ)三十二歳、(ロ)四十六歳。乙説には(イ)二十歳、(ロ)三十四歳。丙説には(イ)僅か二歳、(ロ)十七歳。

丙説は一一七九年忠久誕生説を固持する義務を感じる人以外は斥けるであらう。甲乙兩説が同時の眞たり得ないに拘はらず薩州では其間を考定せずに双方を傳へて地誌の類にも此矛盾が繰り返され

る。固より正確な證據がなき間は共に事實とし難い。假に二説の間を擇ぶならば、甲説は頼朝を忠久の父と見ない人にとつては、三十二歳以後に關東に還つて盛長に嫁したことが少しく後れ咲きとなる難がある。乙説が最も無理がなく、かく見れば内侍が忠久の母たることに年配の上の不都合がない。只惜むべきは此説の文證の信憑すべきものが一つも傳はらないことである。

獨り松下氏は、一一七九年忠久誕生を信奉し、多分と『西藩野史』の「局」の年齢説(甲説)との間の矛盾を解消しようとするためと見えて、一説を立て、曰く、丹後局なる者は母子兩人あつて忠久の母は娘の方の局、即ち比企尼の孫女である、母子同名の故に從來の藩記録は誤つたが、右の事實を知れば年代が合すると(松下九、四四)、其説の根據は越前吉見系、蒲生系(同二八)、比企系(同九、二〇)、越後島津系(同二一)であるといひながら、前の二系を引かず只後の二系を引く。その引用を見るに、比企系には尼の長女は二條院丹後内侍で初廣言妻、後盛長妻、その娘は父惟宗廣言で頼朝卿の妾とある(松下二〇)。別本比企系は之と相似、只内侍を局としてある。(同二一)。越後島津系には忠久は頼朝の子とあつて「母は丹後局所生惟宗の女」とある(同二一)。(引用が原文の語句のまゝであるか明かでない)。注目すべきことは二系共に忠久の母を丹後内侍の女とはするが此女も亦丹後局と呼ばれたことは見えない。是は松下氏の獨斷である。同氏は頗る自説を貴重視して、之によつてあらゆる矛盾を解決し得たと信ずるらしく、從來の藩史家は忠久の父系の研究の精到なるに反對に母系の

研究が割合に淺かつたと見て居られる(同八、二九)。而も此説の弱點は透明である。その引用する諸系の根據と、製作時代と、先後の差と、相互脈絡の在否とについては無言なるのみならず、もし此等の系が元來諸書の年配上の不調合を緩和せんとする目的で母女兩人を假造したならば、此點は何等の史値なきものとなるであらう。前にも余が一言して置いた如く比企系は、吉見系又は其の原料などを基本として出來たものでないかとの疑がある。頼朝の妾を内侍の女としたのは、吉見系の一句を誤解したのでなくば、年齢の不調和を醫せんために設けたものとすら考へ得るものがある。吉見系は内侍「盛長嫁」といひ、「禪尼掣藤九郎盛長」といひ、「禪尼孫島津忠久」と明言して、さて又「盛長妻丹後内侍女なれば」の句を用ひて居る。前の三句で明かな通り最後の句に内侍女といふのは内侍といふ女の義であつて内侍の娘の義でない。比企系は此句を誤解して更に改造し、又は他の理によつて、上の如き説を立て、越前島津家が之を得て傳へたのかも分らない。加ふるに双方共に當代の傍證を全く有しない。松下氏の根本の動機は、一一七九年忠久誕生と頼朝私生と丹後局と稱するものゝ生涯との三個何れも證し得ない傳説を前提事實とし、その年齢の不調合に惱んだ折柄、幸にも或る系圖類に既に忠久を局の孫とするを發見して、喜んで之を採用し、更に局の女にも局の名を與へたのであらう。三傳説をも諸系をも嚴正に批判したのでなく、之を平準し調理して先定の目的に迎合せしめたのであらう。さらば批評よりも彌縫であり、史實の追究には遠く、傳説の宣傳に近いとの譏を免がれないでは

ないか。舊時代の學者の幾久しく重ね來つた傳統的過失を繰り返すに似はせぬか。畢竟、氏の調和せんと試みた矛盾が傳説の中に横たはれるものに過ぎずして、傳説討究の結果と確實なる史實との間に在る矛盾でないことが、氏の論を惱ます根本であると思はれる。

之を要するに、忠久が能員個人の近縁らしい事は彼の一生の史を改造する者に一の基石を與へると考へられるが、内侍が其母であつたことは、内侍を一一四六年頃の誕生とせば内侍の女子といふ局を設ける必要もなく年配が折り合ふことを見るばかりで、之を立證すべき一片の當代の記事が無いことを憾まねばならぬ。

丹後局と丹後内侍

丹後局——『愚管抄』、『玉葉』、『百練抄』、『帝王編年記』、『女院小傳』、『大日本史』十一、三浦周行『歴史と人物』などを參考すれば丹後局の面目がやゝ覗かれる。その素性については『玉葉』は「卑賤者也」と一評するだけであるが、其母は白拍子だといふものあり、父は或は僧章尋とし或は山僧澄雲とする。其名を高階榮子とすることは大抵一致する。『高階氏系圖』を見れば此二僧は高階氏で父子であり、子たる澄雲の女が「從二位宋子宣陽門院母」とあつた即ち局の事である。宋は榮の誤植であらう。又此系に據れば天武皇子高市親王の御子長屋の後裔成章(太宰大貳正三位)から阿波守章行、其子と孫と

が章尋と澄雲として見える。高階氏の此一流は支系であつて成章の外は四五位の間なるを常とし、榮子は山僧二代を隔て、阿波守從四位下の後であり、もし其母が不明又は賤女ならば、兼實が局を卑賤といつたのは強ち彼の例の偏狹の爲ばかりではなからう。『玉葉』(一一八七年二月十九日)及び『女院小傳』には榮子は相模守平業房妻とあり、業房は一一七九年伊豆に流されたが妻が之に伴つたか詳でない。『愚管抄』に七九年清盛が後白河法皇を鳥羽に幽し奉つた時に局が伴つたといふことが真ならば業房は流されて間もなく歿したのであらうか。『女院小傳』には八一年に業房を局が供養したとあるが、是は『玉葉』八六年及び九一年に法皇が業房の爲に供養されたとあるの、誤傳でないと保證し難い。とにかく榮子は八一年以前から宮仕したらしく、八三年平氏西奔の後、後鳥羽天皇が登祚の時に既に局の勢力が之に關係したといはれて居る。實に八五年十二月十八日に『玉葉』が之を法皇の愛妾と稱する以後、その法皇に勢力あることを小心の兼實は頻りに嘆息して居る。基通は局に愛遇されて、九六年に頼朝の向ふを張つて彼が關白職に就任した時にも局の勢力があつたといふことである。其前にかの兼實は局が二位に敍せられたことを八七年二月十九日に非難して居るが、九二年二月十八日には二位まで上つて居る。局は先年からその供養した淨土寺堂(百練抄、玉葉八二年十二月四日)に住した。

『山科御堂領之事』といふ文書(大日本史料四ノ四、三六頁)には、此堂領はもと淨土寺二品所領等に安堵の御起請符を下されたものだといつてある。『東鑑』九一年四月十九日條には局が若狹江取にも領があ

つたことが見える。九二年三月十二日法皇崩御し、同じく二十八日局は落飾したことが同書に載つて居る。法皇との間の御子は宣陽門院觀子(一一八一—一二五二)。是れ余が局の八一年以前から仕へたといふ所以である)と諸書に記され、上の山科文書には冷泉中納言教成が二品の長子であるとあるが確かでない。頼朝は九〇年上洛以前から局と文通したことが『東鑑』同年五月及び六月に見え、『愚管抄』には朝廷の消息を報じたのだといふ。何の緣故によるだらうか。頼朝の九〇年九五年兩度上洛の時に局に懇懃であつたことは『東鑑』に數度記される。又『愚管抄』によれば局は九二年落飾の後も若い承仁法親王との醜聞があつたといふことである。局の名は一二〇六年頃まで見えるらしい。『東鑑』一二一〇年六月十二日に實朝御台所の女房丹後局が京から鎌倉に著いた記があるが、前に云つた如く勿論同名別人である。)

年齢を推せば落髮後の行狀から見ても其時四十歳前後として、一一八一年宣陽門院を生み奉つた時が二十歳に近いといふべく、其前に業房の妻であつたことを思へば、生れた年は丹後内侍よりは十年程も後と考へられる。

内侍と局——丹後の名ある此二人が同時代の別人なることは『東鑑』一書だけでも一瞥して發見し得る所である。内侍は鎌倉に在つて一八六年に病み、局は頼朝が九〇年九五年に上洛の時に訪うた人だ。而して此局が即ち内侍を鎌倉に見るよりも前から『玉葉』に始終評判されて居る宮女であつて、

『愚管抄』其他の京方の記録に載る丹後は皆此人であり、彼等は鎌倉の内侍を知らない。後代の傳説に比企女といはれ忠久の母といはれるのは丹後局ではなく内侍でなければならぬ。されば吉見系、比企系などは正しく内侍と記し、比企別系には誤つて局と書いたが内侍と同人に外ならぬ者である。

薩摩の記録類には古今を通じて常に局の號を用ひ來つたけれども、是亦内侍を局と呼ぶものであつて、此「局」と京の眞の局とを混じた形跡は認められない。恐らく薩州で昔し丹後の傳説の起り始めた頃に『玉葉』や『東鑑』などに見える京の局の事を知らなかつたと思ふ故に、二人を混じなかつたことは自然だと察し得るが、後代に島津家で京の人の事蹟を知り得たるに拘はらず、其の明かに別人なことを悟つて、之を忠久傳説に結び合はせなかつたのであらう。内侍を執拗に局と呼び來つたのは京の局を混じた爲ではない。多分知識未だ幼稚な時から不注意に局の字を内侍に用ひ來つたのを後年まで繼承したのであらう。凡ての宮女房を無差別に局といひ得る所から、内侍をも、其内侍なるを知らなかつた昔は勿論、之を知るに至つても猶ほ局と稱したのは恕し得べきことである。重野が『薩藩史談集』に忠久の母なるものを丹後局又は丹後内侍といふといつたのは此心理を代表するものである。

然るに近年に至つても猶ほ此人を局と稱するものは疎漏の責を免かれ難い。此等の中に二種ある。一は京の局の存在を知つても鎌倉の内侍を猶ほ局と呼び、加之二人を混ずるものであり、一は京女を

知らぬ故に依然として内侍を局と稱するものである。何れも此點は舊藩の學者にも劣る嫌がある。前者の例は『宮崎縣史』が忠久の母を法皇愛妾と注するの類である。『地理纂考』五は内侍と局との同人なるを疑ふといひながら、猶ほ忠久の母を局と呼ぶ。後者の例の中の著しいものとして恐らく松下氏を挙げ得べしと思はれる。氏の殆ど六十頁に及ぶ忠久出自の論説は、豊富の材料を引據して頗る有益であり、余も亦之に負ふ所少からざるものであるが、其長い記事の中に一言も著者が京の局の存在を知つたことを示すものが見當らぬ。忠久の母といふものを氏が常に局と呼ぶのは混合にはあらず無知の故ではあるまいか。前に妄評を試みた如く、氏が母子二人の丹後局ありとの説は關東の丹後と忠久との傳説に年配の不都合ありと考へて之を調停しようとする所から立てたものらしく、内侍と局との年齢の不調和を感じた爲ではない。

二人の別々であることは更めて言ふまでもない。家系も年齢も履歴も後半生の所在及び行跡も全然相異つて居る。もし二人を混ざるならば大小あらゆる矛盾を生ずる。たとへば『玉葉』に一一八六年六月五日兼實が義經の事を奏せんと欲したが法皇が局の宅に在らせられる故に謁し得なかつたとあるに、『東鑑』六月十日十四日には内侍が鎌倉甘繩の家に病んだとあり、更に『玉葉』には七月三日局が法皇に侍した記事がある。病弱の女人が短時間に京鎌倉の間を飛行したこととなる。もし傳説によつて内侍が一一三四年に生れたとすれば、八六年には五十三歳の老病だ。又もし内侍が一一四六年に生れ

たとの説を採れば、法皇の愛人たることの知られる一一八〇年から九二年には三十五歳から四十七歳の間となり、落飾後の若年者との醜聞は京童の根もない評判となる。甚しきは、業房の妻であつた後に宮仕した女が廣言と通じ更に伊豆に行つて盛長に嫁ぎ、もしくは頼朝に通じ、京又は伊豆に孕んだ子を一一七九年に産み、少くとも翌年から二十五年間在京して、一一八六年數日間鎌倉に來り、一二〇五年頃廣言に伴つて南九州に行き、一二一五年又は一二二八年に歿したこととなる。一生涯は驚嘆すべき走馬燈である。一一三四年(又は一一四六年)に生れたとすれば、忠久を産んだ時に四十六歳(三十四歳)、九州に行つた時が約七十二歳(六十歳)歿した時が八十二歳又は九十五歳(七十歳又は八十三歳)、絶倫の精力女である。且つかゝる混同は道義上國民最貴の人を含む數個の人物を破廉恥ならしめる。頼朝は恩義あり親信する盛長の妻を姦し、殊に以仁王落胤説に至つては法皇と父子にして同女しかも老類に傾いた女を愛惜したこととなる。幸にして島津家の記録は實際に内侍と局とを混じない故に、以上の惡辣なる誣言の幾部かに對して無辜であるが、『宮崎縣史』の如きは只一言を以て此等の過失を犯した結果となりはせぬか。

惟 宗 廣 言

吉見系圖は比企尼の女丹後内侍が宮仕する間に惟宗廣言と通じて忠久を生んだといひ、『大日本史』

及び今日の學者は大抵此説を守る (後節の結論参照)。島津家も亦頼朝私生兒説を生じた以前には同説であつたらしい (後段參考)。吉見家と島津家との傳説もしくは二者の原料の間における先後と相互關係の在否とは知られない。此説を吟味するに先だつて惟宗氏の由來と其中の廣言一流の次第とを一應考へねばならない。

惟宗氏は八八三年賜姓の時に秦始皇の裔が二八三年百二十七縣の民を率ゐて歸化したもの、後だといつた。但しかやうに多くの民を携へ來つたといふのが事實ならば其中に卑しい他姓も多かつたと思ふに足り、『日本書紀』に見える多數の秦氏の部民は正しくそれであらう。さすれば此等の後も遂には惟宗と稱したものがあつたらうと疑はれる。とにかく太田氏のいはれる如く天下の大姓であつて、孫甚だ多く四方に散布して次第に諸氏を稱した。惟宗氏には官仕して明法家、太宰府官、諸國職となつたものが頗る多い。鎌倉政所にも早くから引續いて今や知家事となつたものがある。此氏を稱するものは土佐、肥前、豊前、日向などに見える。(太田嘉『姓氏家系大辭典』)。九州には殊に縁故多く、南三州にも大隅の臺明寺文書及び建久圖田帳に其在廳官がある。薩摩には市來、執印、國分など惟宗關係を稱へる諸氏の系圖がある。後には諸國の惟宗氏の中には聖武、醍醐、三條、冷泉等の諸帝を先祖と仰ぐものも生じ、蘇我大臣に出たといふものも現はれたが、此等は恐らく支那人の裔といふのを恥づる情の出でた後の事であらう。始めにはむしろ文化外人の種胤を誇つたことと察する。

廣言と父基言と更に前の孝言とは皆學者であり、皆日向に國職を得たと傳へられる。何れも文章生で、孝言は宇治殿(頼通)の師、基言は近衛家に仕へて京極攝政(師實)の師とあり、又孝言は日向國博士、基言は日向守、廣言は日向介などの官歴があるといはれる。以上三人の此等及び其他の傳説の中には當代の記錄に證すべきものと證すべからざるものとがあらうが、我等當面の問題に對して重要でない故に、一々吟味する要もなく、又傳説の引據を示すことを省略する。

薩州の廣言傳説は頼朝私子説が現はれて後自然改造されて、丹後局なるものが伊豆に還つてから頼朝と通じて忠久を生んだといふことから、其後に局を廣言に與へたことになり、廣言の先妻が畠山重忠の妹であつたと稱し、後に局と廣言とは薩州及び日向に行つた云々と説き、之に連る種々の譚が生ずるに至つた。甚しいのは、廣言を鎌倉武士の様に仕立て、彼は藁藤四郎(比企能員)であつて局の兄だ、忠久下向の供奉の一人だ、忠久に市來の地頭とされた、能員の亂に討死した、否、承久の戰に歿した、などいふ突飛なことを唱へたものすらある。

廣言と忠久——忠久が廣言と丹後内侍との子である説は年配の上からは可能の事である。廣言は一〇八年七十五歳で歿したといふのみならず、彼の歌集の『群書類從』に在るものは永曆から壽永、即ち一一六〇年頃から一一八二年までの集と註してあるが、其中に日附ある唯一首が一一七二年である。又『山槐記』の除目部類の中の一六八年末の除目の記に彼は從五位下として記載される。さす

れば一一四六年頃に生れたと見える内侍と年齢が釣り合ふわけである。しかし内侍が忠久の母であるといふ點すら不確實なのであるから、之に廣言をも結び合はせる説の眞偽を證するのは一層に困難となる筈である。内侍が母なりやの問題は既に一應單獨に論じた故に、以下主として廣言問題を中心として考量しよう。此間は自づから三段に分れる。島津家は惟宗氏であるか、忠久は廣言の子であるか、内侍との子といふ説は廣言を父とする場合如何に批評すべきや。此三段を以下の如くに吟味すれば、第三は最も可能性が乏しく、第二は第一よりも可證の度が少いと思はれる。

一、島津家は惟宗氏であるか。同家の始祖忠久が惟宗氏であつたことの不可能でないことは、彼目から此氏を稱へたのみならず、朝廷も亦彼に此氏を用ひた事實がある。『三長記』一一九八年正月晦日の除目交名は著者三條長兼が自身で清書したのを寫したらしく、其中に左衛門尉惟宗忠久を擧げてある。又島津家に傳へた忠久關係の武家領家文書數通がある。其中には疑ふべきものが過半であるが、とにかく忠久を島津又は惟宗としてある。(惟の字を缺き宗兵衛尉と書いたものもあるが、惟宗を宗とのみ記することは市來家などの系圖にも類例が在る)。もし文書が疑はしいとしても、之を作つた時代に忠久を惟宗氏と信じた根據が在つたであらうとだけは言ひ得る。『東鑑脱漏』に死する忠久を惟宗と稱したのは、それだけでは確證とし難いが、正眞と見える一二一三年七月十日の比志島文書に惟宗忠久とあるは『三長記』の傍證とするに足りる。其後の文書にも度々此氏號が用ひられる。前にい

つた如く『東鑑』に忠久の始めて見える時は一二〇〇年であつて、其時には島津姓を用ひるが、其後の同書の同家に關する記事には時々惟宗氏號が現はれる。忠久の晩年一二二一年七月十二日の文書に始めて藤原氏が稱せられて、以後も此氏號が時々用ひられたが、猶も久しく惟宗姓を棄てず藤原と並用した。『續千載集』に惟宗忠宗が在り、此集及び『續古今集』、『續拾遺集』、『新後撰集』等に同氏の忠秀、忠景が見える。忠景は忠久を祖父と記し、島津系圖に忠久の次子忠綱の二子として豊後守大夫判官忠景が見える。同系に忠宗といふものが二人ある。一はこの忠景の子で同じ官號を帶び知覽家の祖と註し、一は忠久の嫡曾孫下野守で島津家第四代の主(一二五一—一二三五)である。忠秀といふものも、上出の知覽祖忠宗の子大夫判官常陸介宇宿祖として出て居る。歌集に見える諸人が果して系圖に見える島津家の人々と同名の同人ならば、凡て忠久流として惟宗であることがこゝにも傍證を得る。且つ又此等數代に亘つて支家の人までが和歌の才があつて京都の歌集に載せられたことは、忠久の起原に對しても亦重要な暗示を與へるものである。後段に詳しく論ずるが如く、忠久は少くとも前半生は京人である。その故に子孫に至つても京に仕へ又は京邊との關係を保つて、尋常一様の御家人武弁とは異なり、幾分の傳統的教養を承け傳へたと思はれる。

以上の説に注目すべき二個の要點は、忠久から自他共に惟宗氏を以て許したと、惟宗氏の實名に忠の字を負ふものゝ多いことである。中にも忠の字については、常に忠久の一流に之を傳へたもの

が多數であるのみならず、上に引いた『三長記』に忠久と同時に敘任された惟宗氏が外に大藏丞忠成と少内記以忠の二人あることを見ても知られ、忠久流のみの特色でないことがわかる。忠久自身も亦島山重忠を烏帽子親とするまでもなく惟宗氏たることによつて忠の字を持つたと思はれないでない。又此點は忠久が數代言の字を用ひ來つた廣言流の惟宗氏であるとする説を助成する力を缺く。

二、廣言は忠久の父であるか。吉見家の此説の由來は不詳であるが、島津方での初見は第十三世紀後半の早い頃である。『酒匂安國寺申狀』に據れば、忠久の孫久經(一二二五—八四)の時に其弟久時と市來政家との間に系脈の論があつて、双方から「奉行所」に系圖を差出したのを見ると、久時の系は廣言を忠久の父と稱した。(松下氏は何の根據あつてか之を一二六五年の出來事とする。又『島津國史』二と同じく之を鎌倉問注所での吟味とする。是れは多分安國寺狀に奉行所とあるのを四十餘年の後に『山田聖榮自記』に「文注所」と寫し改めたことから國史が速斷したのでなからうか。島津家での吟味と見る方が妥當と思はれる)。猶ほ安國寺の記を見れば、政家の提出した系圖には「宗大納言より以來忠康忠久と被出て候」、久時の方は「元祖蘇我大臣以來民部大輔廣言忠久と御書候」。附けて曰く「爲後日我等が方にも書付て置候、執印家にも少もたがはず書付置れ候を見申て候」と。政家が宗大納言といひ久時が蘇我大臣と言つたのは、土佐の惟宗氏同様先祖が支那人でないといはうためであらうが、何れも惟宗氏なるを否むのでなく、此氏が元來日本人だといはうとするのである。(右の市來系

が忠康の後に忠久を置いたのは、『島津國史』及び松下氏のいふ如くに忠康の子を忠久としたものと解するは如何であらうか。河上家藏の惟宗系には、相論の時に奉行所に出した二系圖を復原すると稱して、久時方の中には廣言の子忠久忠季とし、政家方の中には忠友(是は廣言のことであらうことを下に參考すべし)の子忠康、其子忠久としてあるが、これは確かに後代になつてから其頃の材料に據つて安國寺の記する所を説明しやうと試みたのであらう。且つ又市來國分執印等の系譜は、とかく不注意に或は兄弟を縦線に次序し或は反對に父子を兄弟なるが如くに——甚しきは父子兄弟を併せて——同一横線の下に並列することがある。後代の市來系には明かに忠康と(忠久の弟)忠季とを兄弟とし、河上藏の國分執印系には三人を兄弟としてある。後代の島津記錄の如きは廣言の先妻が重忠の妹で其腹に忠康が生れ、丹後局が賴朝に幸されて忠久を生んでから廣言の後妻となつて彼との間に忠季を生んだとまで言つて居り、上記の國分執印系にも之を受けてある。

さて安國寺の記事で双方の系圖を比較すれば面白い差異が現はれる。市來方は廣言を擧げないに反して島津方のみは彼を忠久の先人とした如くに書いてある。同記に「久時の方よりは同惟宗姓ながら各別之由被仰ける程に」云々とあるは、各別とは此點を指すか、又は遠祖が宗大納言たり蘇我大臣たるの差を示すのか、讀者を惑はしめる。此點は本問のために研究の値あるものである。然るに薩州の惟宗氏諸家の現存の系圖は皆後代のもので、その早い部分が相論當時のまゝを傳へたか否か明かでない。

い。暫らく此等の示す所を語らう。市來系は『諸家調』といふ寫本には原本が燦失の後に在つた寫しから市來次郎左衛門が藩廳に報告したものとある。その系には正しく廣言の子忠康忠季と記して、只忠久を除く。河上家藏の國分執印系には廣言の子に忠康忠久忠季を掲げること上に引いた如くである。然るに上井家藏の惟宗系には忠友なるものゝ子忠康と記し、其下に縦線を隔て、忠久を擧げる。是れが即ち上に見た河上藏本にある政家提出の市來系の復原と稱するものゝ原料であらうと思はれる。此忠友といふは誰であらう。上井藏の上記の系には忠友本名友重と注し、其弟に友親忠國の二人を列し、友親を八文字民部大夫と註して在る。是れこそ世に一般に傳へる廣言と同じい俗稱及び官號である。而も此處には彼は忠康の父ではなく叔父となつて居る。而も同じ上井藏の『執印古系圖』には八文字民部大夫は忠友のことであり、只彼に惟宗系に見える二弟を缺き一弟高友を記す。されば此處では廣言と同稱號の忠友が忠康の父である。かやうな相違は諸氏の系の別本の間に類例が甚だ多い。しかし上井藏の二系と河上藏及び市來次郎の二系とを併せて考へれば、前者の忠友が後者の廣言と同じいと察せしめるものが過半数である。又たとひ二人が別々だとしても、少くとも後代の市來系、國分執印系が廣言を忠康等の父として居ることは明白である。以上の事實から推して、安國寺記における久時政家の二系の廣言有無の差は二様に解することが出来る。相論の當時に市來家では廣言關係を認めなかつたか、もしくは安國寺の記事が市來系をあまりに略抄したが故に本系に在つた廣言の名を漏らし

たか、二つの孰れかでなければならぬ。もし甲の想像が事實ならば、廣言關係の説は先づ島津家から發して後に市來等が之に倣つて挿入したこととなり、乙の推察が正しくば、相論の時代に兩家共に此説を稱へて只遠祖について「各別」であつたこととなる。又乙に考へる如くならば、甲による想定とは反對に、廣言説はむしろ廣言が祖父より三代も南三州邊に任官した事を知つて居た古來久しく在住の市來家等の系に先づ現はれ、彼等の傳説を新たに渡來した島津家も亦己れに採用したのかとも考へ得る。假想としては乙の方が甲に優るやうに思はれるが固より早い確證を缺く想像に過ぎぬことは彼是相同じい。但し何れにせよ相論當時即ち第十三世紀半よりやゝ遅い頃に少くとも島津家には廣言を忠久の父としてあつたと安國寺が記録したといふ事實は争ふべき餘地がない。(安國寺狀も聖榮自記も寫本であり、余の所有する寫しが正しいか否かを知り難い。怪むべきことは『島津國史』二の系圖相論の記事に政家の系が廣言の子忠康云々と在つたとしてあることである。其引據として道忍公(久經)舊譜と聖榮とを擧げる。安國寺を擧げぬのは之に廣言の見えぬこと余の謄寫と同様である故であらうか。余の聖榮にも亦廣言の名が無い。國史の相論記事に此外にも數個の不正確の發見されるのは、或は皆久經舊譜の傳へたのであらうか、又は國史自身の不注意によるであらうか)。

しかし安國寺の記事は相論から百五十年以上の後に書いたものであることを忘れてはならぬ。もしも記者が自から抄寫した諸系譜より得た點を往年の相論の記に注入したものがあつたならば、相論時代

に島津家が廣言説を守つて居たとは斷定し得ないことになる。但し假りにこの相論記事が正確であることを許すならば、廣言を忠久の父とすることは忠久の死後四五十年にして既に存在したといふ結點に到着する。久時の兄久經は祖父忠久の歿する一二年前に生れたとなつて居るから、この兄弟が父忠義から忠久の父の事を聞いたのであらうことが可能となり、かくも早く近き祖先の誰であるかを忘れて縁のない廣言を持ち出したことは不可能であらうとさへも考へられる。殊にもし相論の時に市來方にも忠康の父を廣言と言つたならば、猶更に島津家の廣言關係の主張が棄て難いものになる。此等の疑問を解決し得べきものは只々當代の確證を得來ることの外にあり得ない。故に安國寺の示す廣言説の文永頃における存在はその運命を他證の有無に繫ぐものであり、畢竟條件附の可能性あるに過ぎない。憾むべきことの一つである。最後に注目すべきことは、安國寺の記事には島津系圖に忠久を廣言の子としたとは稱するが、彼の私子だといつたとは見えないことである。此點は直ちに次の間に連る。

三、忠久は廣言と内侍との子であるか。安國寺の相論記事には何等廣言と内侍との關係を語らない、従つて忠久が彼等の私生兒だとはいはない。その沈黙は久時の差引した系圖に此關係を示さなかつたことの證とならないが、積極の證なき限りは第十三世紀に島津家に三人の傳説の在つたか否かを知り難い。廣言・人との關係すら證し得ないのであるから之に内侍を結べば一層に困難を加へるのである。

二百年後の第十五世紀に至れば三人關係の傳説が既に著しく成熟して居たことは、此世紀後半の『山田聖榮自記』が明かに立證する。但し此時には頼朝と内侍とを忠久の父母とする説に廣言舊説を改造して攝入したのであつて、廣言は内侍私通の汚名から救はれて單に内侍の夫となり變つて居る。此説は世紀後半のみならず前半の安國寺の頃にも既にあつたのであらう。何となれば更に早い相馬道聖(即ち一三六九年に生れた島津忠朝)が既に忠久を頼朝の第三子といつたと聞く(松下五八)。現に安國寺も信濃の島津氏中沼家は頼朝の出と稱して源姓を冒したといつて居る。信濃と薩摩との中孰れが先づ之を唱へたかは不明であるが、頼朝と内侍を忠久の父母とする説は、その前に廣言と内侍との關係の説の在つたのを轉化、流用したのであらうと疑ひ得る。果して然らば、廣言内侍忠久連合の傳説は、たとひ第十三世紀まで溯り得るか否かわからぬにもせよ、可なり古いものかも知れぬ。但し以上の如くに觀れば、此傳説は頼朝説よりは古いと見得るけれども、その事實の可證、可然の程度は單獨に廣言を父とする説よりも著しく劣ると見るべきものであらう。

こゝに廣言内侍傳説の評に附言し得べき一事がある。即ち安達盛長が此傳説の中に占むべき地位は如何との問題である。内侍が關東に還つて盛長の妻となつたといふ吉見系の主張が『東鑑』に證明されることは既に論じた所である。少くとも此點は單に廣言を忠久の父とするだけの説よりさへも根據が強い。然るに此事は廣言と内侍を結ぶ傳説とは都合よく折り合はぬ。内侍が京で忠久を生んで後に

歸東して盛長に嫁したならば、母と別れた忠久は二十年程の後に鎌倉に來るまでは何處に在つたのであらう。或説の如くに彼は父廣言の家に養はれたとすべきであらうか。論理上可能事ではあるが、此事は忠久を詳しく記すべき要のない吉見系圖には見えず、只遙に後に薩摩で頼朝を忠久の父といふやうになつてから現はれる所である。もし文永頃に島津家が安國寺のいふ如く廣言を忠久の父といつたにもせよ、其時に内侍を彼の母としたことは明かでないのみならず、まして内侍が盛長に嫁したことは當時未だ知らなかつたと思ふべき理由がある。その證は、同家が頼朝を忠久の父といふに至つても猶ほ「局」が廣言に與へられて母子共に彼の家に在つたといひ、全く盛長を犠牲にして居る驚くべき事實である。廣言夫妻をば同家の傳説はさすがに懇切に待遇して之を薩摩まで迎へ取り之に安穩の餘生を與へ、死後には之を忠久に配祀までして居るが、之に反して盛長をば沈黙の裡に埋葬した。もし盛長と内侍との婚を知つて居たならば、かゝる手段を用ひた筈がない。多分頼朝傳説の始めには此婚を知らず、後に至つて吉見系に之を發見した時には、廣言内侍の後半生の傳説が既に弘布して、もはや盛長を幽界から起し來つて新たに與ふべき餘地が無かつたのであらう。或は此評を反駁して内侍は盛長の死後に廣言に與へられたといふ者があらば、余は敢て答へよう、記録に政子の妬によつて母子を廣言に付したといふのは『東鑑』に頼朝の死後猶ほ生きて居る盛長の死を待つて始めて其後家を廣言に與へたといふ意味と見難いではないか、忠季が其後に二人の間に生れたとせねばならぬではないか、と。

以上余が廣言傳説を三個に分析して其史學的價値を尋ねた結果を大括すれば、余の豫じめ暗示した如く、第一點(忠久は惟宗氏なり)は三點の中で最も可證性が多く、第二點(忠久は廣言の子なり)は或る史證の出現を待つ條件付き可能性があるに過ぎず、第三點(忠久は廣言と内侍との子なり)は猶ほ譚話の域を脱しないことを見る。

廣言内侍傳説の由來——島津家が頼朝説を唱へる以前に廣言乃至内侍を忠久の實親として居た時があると假定して、その由來を想像して見よう。之が基本となつたものは忠久が惟宗氏を稱した事實であるといつてよからう。之に廣言と内侍とを織り入れたとせば、その次第如何。

甲、廣言。薩摩に惟宗氏と稱する執印、國分、五代、平野、羽島、市來等の諸家、及びその支流の多く在つた事實を看過してはならぬ(但し正確にいへば市來は本來大藏姓であつて後に至つて女嗣に國分家の一子を妻はしめてから惟宗姓となつたことにしてある)。前に言つた通り惟宗氏の九州に在職したものが多く、殊にその廣言一流は代々日向等に國職を持つた。さらば此邊に縁故が在つたであらう。或は内藤及び太田氏の想像の如く廣言流が島津庄の庄職をさへも持つたことがあるかも知れない。此等の事情を基として薩州の或る惟宗系の家が先づ廣言を自系に編入し、さて後に島津家が下國するに及んで、自分の惟宗系の中に同じく廣言を加へるやうになつたかとも考へられる。さすれば廣

言を取り入れた順序は、士豪の惟宗が先だつて新來の惟宗島津が之に倣つたことになる。但し更に後代には之と反對に既に詳密を加へた島津家の傳説を他家の系に移し入れた點もあらう。たとへば後世の國分執印系、市來系に忠康を廣言と畠山重忠の妹の子とし、忠久又忠季を彼と丹後局の子とするの類である。(但し市來の遅い系圖に廣言の子といふものゝ中から忠久を省いてあることが注目される。政家と久時との相論の既に示した如き一種の反感を後まで保つた故であらうか、はた島津家の頼朝説を敬遠したためであらうか、こゝに詮議する要もない)。しかし他方から觀れば、島津家も亦單獨に廣言を系圖に入れるのに便利な地位に在つた。忠久は九州の士豪ではなく(後に述べる如く)上半生は京人であつて、多分近衛家の恩顧の下に在つた。廣言も亦傳説に據れば同家の門下の人であつた。さすれば二人は相識の間柄だらうと思ひ易いのみならず、年齢の上から父子としても差支ない程の開きがある。故に廣言説が先づ島津家に唱へられ、又は同家と薩摩の他家とに互に獨立に起つたかとも考へ得る。この二個の先後關係説の中孰れとも余等は決し難く、又共に空想に屬することを認めざるを得ない。

乙、内侍。もし久時政家論争の時に島津方では忠久の父を廣言と唱へても母については未だ定説がなかつたと假定するならば、内侍を廣言に結び合はせたのは其後の企てであるとすべきことは勿論である。果して然りとせば、後説を唱へる人の時から昔しの内侍及び忠久の生涯を顧みれば、此説を立

てるに都合のよい事情を容易に認め得たであらう。内侍の在京の年配は忠久の母たるに不都合がないから、既に廣言の子といはれた者を彼と内侍との間の子だと言ふに難がない。且つ忠久が鎌倉に出仕してから重く用ひられた事實と、頼朝と比企家との間柄の親密とを併せ考へて、之を右の推定に結ぶことが自然だと見える。而して後に至つて『東鑑』を識るに及んでは、比企家の頼朝關係を更に詳しく知り得て、愈々自説の信念が加はつたであらう。まして忠久が能員に縁坐したことの記事は一も二もなく此説の確證として喜び、その所縁は内侍との關係よりも能員との關係を指すのでないかと反省する餘裕がなかつたのであらう。とにかくに内侍を取り入れる一事は先づ島津家に起つて次に薩摩の惟宗諸家に借用されたのであらう。上述の事情上もあるべしと思はれるのみならず、その一證とも見るべきものは上井家藏の『惟宗姓執印正統古系圖』といふものゝ寫しである。此系には原本の不注意を傳寫したに由る難點と他の誤點とを含んで居る。今は只本論に必要な部分だけを掲げよう。「宗太納言の御子安友」といふものを記して、之が傍註に「薩摩國司等、判官忠久之母儀丹後御室兄也、依之安友養子仕也、是頼朝忠久ヲ養子仕薩摩國ヲ渡給也」といひ、更に其子康友と記し、之にも「判官忠久母儀丹後御室之兄、康友歟、頼朝御子忠久養子仕候て薩摩國護」云々と註する。後註は必ず原本の前註を改正せんとしたものであらう。「康友歟」といふは原本の前註を安友に付したのは康友に付すべき筈のものだらうといふ意味らしく、「頼朝御子忠久」とあるは前註の「頼朝忠久」といふ不明の句

を脱字ありと認めて改書したのであらう。寫者の意見は二點共に正當であらうと思はれる。（餘事ながら、此系に安友とあるは、前に見た上井藏本『執印古系圖』と河上藏の古系復原とに現はれる忠康の父忠友の誤であらう。その外の執印系にも他の惟宗諸家にも一五三四年造立の木版『惟宗姓國分氏正統先祖』なるものゝ寫しにも、康友があつて安友が無い。それはともあれ、初に引いた執印系の忠久に關する亂脈は其島津家の單純な廣言内侍忠久の系統說から發して之を轉化して康友に附會したものであると觀易い故に、明かに島津系より後に作つたものである。

以上の一段の傳説由來は、繰り返して注意を喚ぶまでもなく一片の空想として觀るべきものである。

廣言内侍忠久傳説の活力——此傳説の後代における運命を検すれば頗る注意すべき現象を見出だす。之を約言すれば、（一）薩摩の他の惟宗諸家には傳説の勢力が次第に衰退し、（二）島津家にては旺盛な活力を持續して最後まで忠久起原説の根本的且つ必要不可欠の要素である。

（一）他家には、早い頃から此傳説があつたことが明かでない。廣言を父とする一面すらも政家久時相論の時に市來方が唱へた證據がないのみならず、其子といふ忠康と忠久とを父子と見たか兄弟と見たかさへも斷じ難い程である。後には、上に説いた如く廣言と内侍を系に受け入れ又明かに忠康忠久を兄弟とするものもあるやうになつたけれども、諸家の系圖を比較すれば、傳説の一切の分子の活力

の乏しさに驚かざるを得ない。諸家系の問のみならず同一家の諸系の問も亦、甚しく分岐し去つて相一致する點は大に減少した。第一に祖先を宗氏と稱するものが數種あるけれども、其惟宗氏の略稱であらうことを殆ど忘れた如く見えるものさへある。或は宗某が紀家に掣入りしたといひ（河上家藏國分執印系）、或は宗氏が聖武（上井家藏惟宗系）、醍醐（邊川家藏同系）、又は朱雀、三條（上井家藏執印系）帝に出づといふ。次に廣言流を系に留めることには更に不熱心で、孝言基言廣言を相次ぐ三代として算するものは只一あるのみで、（邊川藏惟宗系）、廣言の名をだに保つものは二つのみだ（河上藏國分執印系、市來の自系）。或は廣言が忠友となり（上井藏惟宗系、河上藏市來政家系復原）、或は孝言が忠言と變り（上の後系）、孝言又忠言と忠友との間に一代の代りに三代を隔て（上の二系）中間に紀氏を挟む（上の後系）。又は廣言又忠友を安久と稱して之を康友と混ざるが如く、もしくは二人を父子とする如くに記す（上井藏執印系）。島津家に倣つて忠久を賴朝及び内侍の子とするに及んでも、上に見た如く康友を内侍の兄とし忠久を彼の養子とする突飛なものすらある（上井藏執印系）。市來系に至つては、その採用した廣言說をば固持しながら、島津家傳説を尊重する故か、排斥する故か、廣言の子息の中から賴朝より受けて養つたといはれる忠久を全く省いてある。之を要するに此等諸家の廣言傳説は全圖に亘つて薄弱で、根本の惟宗氏たる主張すらも頗る弛んだ如くに見える。かゝる現象は、廣言傳説の本來はかなきものであつたことを示すものであらうか、又は島津家の賴朝說に

威壓されて廣言説の活力が猶更に衰下したのであらうか。それはとにかく此等諸家の遅い系圖は忠久の出生を確かめようとするものに取つて甚だ心細いものである。

(二)之に反して島津記録における廣言傳説の精力は強盛且つ長命である。遅くも第十三世紀後半に少くとも廣言を忠久の父と言つたとすれば、其後何時からか之に内侍を結び三人を連ねる傳説が成立して、或る年所の間に可なり深く根を張つたと見えて、更に後に頼朝が廣言に代つて父となるに及んでも、廣言を抹殺することが出来ずして、新説の中に舊説を收容し改造し、慫慂に彼の餘生を勞はり、更に新たに日薩における廣言内侍の幾多の譚話をすら作爲するに至つたことは前に見た如くである。一六八九年に一僧の記した満家院厚地村平等王院の縁起と一七八九年に藩撰の花尾社の廟記とは此社に頼朝と丹後と其歸依した僧永金とを配祀したといつたらしいが、之に近い東俣村の一之宮大明神には忠久廣言丹後を祀つたといふさうである(三國名勝圖會一〇)。實父としての廣言は養父と變つても猶ほ榮えて最後まで傳説の内に重要な地位を保つたのである。實にその餘勢は今日にも及び近時の學者は一般に頼朝關係を排するに係はらず、同じく一般に忠久を廣言及び内侍の子とする。是れ吉見系圖によるものであるが、又實に島津家が忠實に廣言傳説を扶持したこと恩澤が今の學者をさへ霑ほすものであるとも云ひ得やう。如何に島津家出自論の運命が廣言の存在に結ばれたことの堅く且つ久しいかを見るに足らう。

しかしながら傳説の活力の多少は、その事實たることの可能性の多少とは必ずしも同一でない。殊に廣言傳説は、以上の所説から見れば、其二個孰れの形を取るも史的事實の中に算入し難いものたるを免れないと思はれる。

源頼朝、畠山重忠、近衛基通

忠久を頼朝と丹後局との私生兒とすることは、島津家系における祖先傳説の中心點、最も貴ばれた點であり、又最も夙く唱へられたのでないにしても、最も長い間保持された點である。此點はかくも重要視され、かくも久しい歴史を有し、従つて又多數の事項を其中に含み、畠山家及び近衛家との關係も亦之に伴つて重要な地位を與へられて居る。故に便宜に隨つて數項に分つて之が吟味を試みよう。

頼朝説は比較的遅く生れて、久しく發達した——前に見た如く第十三世紀半頃よりやゝ後における市來政家と島津久時との相論には双方共に惟宗氏と稱し、少くとも久時は廣言を忠久の父としたが、何れも頼朝の事を語らなかつたことが安國寺の記に見えて居る。さすれば相論當時には未だ源氏説がなかつたと見るべきであらう。然るに記者自身の附言には「信濃の中沼殿様を尋申て候へば、頼朝の子孫にて候間源氏にて候へと上意にて候とて、近年より源氏にて候由被申て候」又安國寺記の一本には「信濃の島津殿は近來源氏にて御入候」といふ、之に反して「先年京都にのぼりて候時三かた殿様

を尋て候へば惟宗にて候由被仰候間、系圖を所望仕候てうつして候、久時之奉行所へ御出候にかゝはらず」とある。こゝに三かた殿様といふは忠久の弟忠季に起る若狭島津で『若狭國守護職次第』や『若狭國稅所今富名領主代々次第』に見えるものであり、『西藩野史』二にミツフサと讀んである三方である。中沼殿といふは忠久の子忠義の一子高久を先祖とする。さらば此記事の書かれた一四三〇年前後の頃には信濃島津家では近頃頼朝説を採用したが、若狭も薩摩もたとひかゝる説が在つたとしても、猶ほ未だ藩家で公然之を取上げなかつたと推察される。此頃薩州にも此説の在つたらしいことは、一三六九年に生れた相馬道聖即ち島津忠朝が忠久を頼朝の第三子と稱したのが、最早く知られ最も信すべき證だと、五百年後の伊地知季安が評したと聞くので知られる(松下五八)。余は道聖の記録を見ない故に、其頃に薩州で頼朝説が何程までの詳細に達したかを知らない。第十五世紀後半の『山田聖榮自記』に至れば、細かに此説を述べて、忠久は義〔能〕員の妹丹後局が生んだ頼朝三男であるが「然に二位殿〔政子〕御妬深により、八文字民部大輔〔廣言〕と申人に丹後局を給、妻として忠久をも八文字民部大輔が宿所に育ひ奉る」、奥州征伐の時(一一八九年)猶ほ政子の始によつて隠れて居た十三歳の彼を畠山重忠をして元服せしめ、忠久と號し、「此時は斟酌も入まじきとて左折の御鳥帽子源氏恒例として召せ……頼朝の御免有る上はとて聲に取中、同陸奥國の先手御大將に御越候」。仍りて頼朝から「御旗御十文字の御紋其外兵具一々受、御直垂の縫とちは忝も頼朝我と御とき御約束、今におゐ

て知人なし、夫より當世迄も御一家御内衆もとかれ候畢」、「忠久御元服の事は當家之秘事候」、さて忠久は重忠と共に行軍し、歸つて後「御恩賞有り、東國の事は如此平らげあり、爰末西國之末日向大隅薩摩とう地頭御家人強之國なり、伯父鎮西八郎爲朝鎮守府將軍として打隨、其儘三ヶ國に住居有りし其國なれば、忠久が自國に持べしとて御讓與云々、御領之國は七ヶ國、伊勢若狹信濃越前薩摩大隅日向國々の御本領六十七ヶ所畢」、局が折々に廣元、親能の口入にて「同者天下に應ぜざらん遠國を忠久に知せ給度之由被仰候、依而奥三州御入部也……頼朝の繼書御判にも三ヶ國地頭御家人は忠久が下人たるべし……」、「御先祖名將の御事を申さる爲に書記置所也、努々自口にあらす」など、書いてある。これで觀れば第十五世紀後半には、頼朝の子といふ説が既に前から在つたが故に可なりに細事まで修飾するの程度に達し、且つ數通の下文と稱するものも既に在つたことが知られる。但し猶ほ世に知られぬこともあり就中直垂の秘事は「知人なし」としてある。聖榮より四五十年以前の安國寺記には近頃から信濃島津が源姓を冒したといふに似るから、或は信州地方に源氏を唱へるもの多きを見て、同家は更に秀でた源系であることを示さうために頼朝説を唱へ、それが薩州にも傳はり、此半世紀程の間に次第に詳しい修飾を加へ、之を證するためには前から他の目的の爲に作つてあつた或る文書をも使用したのかも知れぬ。それはとにかく重野の史談集には薩州が後に頼朝傳説を公然採用したのは聖榮の記を主なる根據としたかのやうにいつてある。

かやうに第十五世紀後半に傳説が多少の細かい點まで語り得るやうになつて居たのを見れば、其發生が更に古く、漸々尾鰭が添へられたものと想はれる。その後には猶更に數多の譚話が愈々益々加はつて、遂に出來上つた矛盾撞着の充満する鬱然たる譚叢は、アフリカ深山のデヤングルが日光を遮斷して一旦迷ひ入る者をして進むべく抜け出づべき術なからしめるに似る。

たとへば二條院崩じ(一一六五年)て後も猶ほ宮中に仕へたといふ局が、二十年間(一二六〇—一三八〇)頼朝幽居期を通じて伊豆に仕へたといふ。局を嫉妬した政子は孕婦を殺さうとしたこととなり、伊豆に在る者を由比ヶ濱に投ずべく命じたといふ(此點は新井白石も指摘した)。妬まれて局は竊かに去つたといふもあり、頼朝が之を日向に流し、能員をして同伴せしめ、生兒が女ならば云々、男ならば云々と訓示したといふもある。途上で忠久を産んだといふ一齣は最も苦心して物語り、遂には細密の點に至るまでを具備する劇詩となつたもので、之を詳しく物語るに堪へないものがある。その如何に里人に宿泊を拒まれ、住吉社の境内に大雨の夜中に石の上で安産し、稻荷の狐が狐火を以て照らし、雨が不淨を洗ひ去り、如何に翌日(一一八〇年元日)の早朝折よく攝政殿下が偶然參詣されて母子を京に携へたか、など皆人口に膾炙する所である。こゝに基通が突飛に元旦に住吉寺で詣でるといふ異例を演じ、之によつて將來彼と忠久との間に結ばれる關係の伏線が設けられた。又こゝに稻荷神護の譚が出來て、松下氏が島津家が建てた分のみを算へても二十餘社に及ぶほどの多數の稻荷様が南三州に出

現するに至つた由來が示される。忠久の誕生を頼朝に報じたものは、單の風聞とも基通とも又は能員ともいふ。さて此處に廣言が現はれるのであるが、彼に母子を與へて養はせたのは基通が直ちに京都で與へた如くもあり、局が伊豆に歸つて頼朝から與へられたやうでもある。とにかくこの爲に盛長は空中にさまよふことになる。甚しきは廣言を關東武士と考へて能員と混同するやうな俗説さへある。酒匂家の如きは忠久の生れる前から景貞が預つて其守役となつたといつて居る(松下一二)。さて忠久が七歳の時に頼朝と會見して、重忠から元服され命名され、同日 伊勢二箇處の地頭に補任されたこと、之から暫くの間に島津庄及び信濃一處の地頭とされ、三國の守護とされたこと、之とは矛盾して聖榮が一一八九年忠久十三歳の時に征奥を機として、重忠から元服されたといふことなどは繰り返すに及ばぬ。或は一一八二年四歳の時、母子共に頼朝に會つたといふ(松下一三)。政子は一一八九年にも猶ほ面會を拒んだといひ、竊かに指し示させたともいふ。聖榮は頼朝が忠久の直垂の縫とちを解いたといふが、他の説には忠久が京を辭する時に基通が彼の直衣の菊團を紀念として取つたにより、一一八九年頼朝が菊團を付けようとしたのを重忠が諫止したといふ(松下四三)。聖榮は既に其時に頼朝の與へた種々の物件を列擧したが、その種目や説明は次第に増加し(松下三五—三六、四五—四七)、之によつて十字紋及び色々の家寶が事々しく解釋される。以上の外にも基通との關係につき、廣言と局との後半生及び歿した時と處とにつき、許多の相補ひ相衝突する傳説がある。此等限りない

話片は今より一々起原と先後とを連脈とを尋明し難い。之を記録に留めてある年代の順序は譚の發生の先後とは別問題であると思ねばならぬ。それは如何であらうとも、島津家傳説の久しい間に多くの人の手によつて作られ、飾られ、歪められて來た徑路は、必ず古今東西の長い發展を經過した fables や Märchen のそれと大體相似たものでなければならぬ。

島津家で右の久しく成長し來つた賴朝傳説を公然と採用して源姓を冒したのは(次項に説く如く)第十七世紀の初半であるらしい。又其頃から從來の繁多の譚話の中より成るべく相矛盾せぬ分子を拮据して忠久の生ひ立ちを記録するやうになつたらしい。何となれば家の系譜の正式に作製されたのは此時代から證し得るによる。一八〇二年に出來上つた『島津國史』の序と凡例とに據れば始めて文書奉行の職を設けたのは家久の時(一五九四—一六三八年)であり、奉行平田純正が「公家の舊書を閱」して忠久から家久までの『新編島津氏正統系圖』を編じたのが光久の時(一六三八—九四)である。是れ或は寛永年間に幕府が諸藩の侯家の系譜を徴した事實に促された編成であらう。とにかく此後は「世々純正の緒を續ぐ」とあるから、次第に追加したのであつて、重年の時(一七四九—五二)までの『續編』を作るに至つた。其後も系譜と記録とは益々延長して浩翰となり、『島津國史』を編する頃には「舊譜數百卷、紀事撫實、細大不捐、既已詳矣」とある。しかし右の續編を作つた後に至つて、舊式の系と記との添加を繼續する傍ら、別に史傳體の編輯を試み、先づ成つたのが約一七七〇年頃の

『島津世家』で、更に辭を修め嚴格な漢文を用ひ、春秋の筆法をさへ摸して一八〇二年に編了したのが即ち『島津國史』三十二卷で、忠久の時から一七五五年重年の歿するまでを論述した。他方系譜の編輯の重要な一段落を來したのは、寛延年間に幕府が重ねて諸侯家の系圖を召した時であつたと思はれる。何となれば其結果として幕府の作つた『寛政重修諸家傳』の一〇八に掲げる島津系の序言に下の如く藩家の言を引いてある。「寛永にたてまつれる系譜は古代のことにして編集の校正も全からず、其後家藏の文書舊記等に參考して改撰す、今さゝぐるところの系圖これなり」。されば寛永から寛政まで百五十餘年の間に、加補するのみならず、又改竄をも行つたことと思はれる。又此外に寛政の改撰以前百年以内に略譜を作成したこともあつたことは次段にいふ如くである。

右によつて察すれば、江戸時代には和漢の學問の長進した時であるに伴つて、島津記録は、その史傳體のものゝみならず、系譜記録も亦偏へに「紀事撫實細大不捐」とばかりは云ひ得ず、多少の撰擇取捨を行つたであらう。従つて源頭を飾る忠久の傳説も亦、從來の繁茂したデヤングルの收獲を幾分整理して甚しい俗説を抜き捨てたらうと考へられる。固より傳話は如何に彫琢しても其本質を蔽ひ難いことは勿論であり、全く之を放擲する勇氣を欠く以上は最後に至るまで史學の批判を免れ得ない運命にあるものではあるが、當時進んだ研學によつて知り得た歴史事實と成るだけ調和せんと試みるだけのことは必ず爲された筈である。その成果とも見做すべき『島津國史』の忠久出自の記事は即ち藩

家の正統傳説と稱すべきもので、之と俗間の荒唐無稽な譚片を多量に含む傳説とを比べれば藩學者の苦心の一端が窺はれる。故に一應完成した頼朝傳説の典據として之を引かう。余の此長い拙論は全篇左の引用文の註釋且つ批判たるに過ぎない。

「得佛公名忠久、姓島津氏。源頼朝長庶子也。幼字三郎。……初丹後局得幸於源頼朝、有姪。夫人北條氏聞之怒、使人潛殺之。頼朝乃宣流局日向州、陰使具兄比企判官能員奉之以逃。而屬焉曰、所生女也則惟汝所處、男也則以報於我(據山田聖榮自記)。行至攝津住吉社下、生男、實爲得佛公。是歲治承三年也。會藤原基通謁社、因取公及局而歸、使告頼朝。頼朝名公曰三郎。出局嫁八文字民部大輔惟宗廣言。故公從母畜於惟宗氏(據島津系圖、島津譜略)。文治元年乙巳夏六月十五日源頼朝召公於鎌倉鶴岡而見之。於是公生七年矣。乃令畠山重忠加之元服、名曰忠久。初任左兵衛少尉(據島津譜略)。是日下文以公爲伊勢國須可御莊波出御厨地頭職(據得佛公舊譜)。秋八月十四改元、十七日下文以公爲島津御莊下司職(據得佛公舊譜)。……二年丙午春正月八日下文以公爲信濃國鹽田莊地頭職(據得佛公舊譜)。其後又以公爲島津御莊總地頭職。因賜姓島津氏及十字家紋(據島津系圖、島津譜略)。……是歲創建稻荷大明神社於山門院(據島津譜略)。公之生於住吉也、暮夜暗甚、忽有一狐持火照之、其形若擁護者然、蓋稻荷大明神之顯靈云(據山田聖榮自記)。故公之就國也即建稻荷大明神社以爲島津氏主。……二年丁未……秋九月九日下文以公爲薩隅日三州守護

職。……。」(此稿は忠久の生ひ立ちのみを論ずるもの故以下を引用せず。守護職等のことは他日論じよう)。

誕生の記の註の中にいふ「按大日本史源頼朝傳注、引島津家傳云、某爲惟宗廣言壻、冒姓惟宗。據吉見系圖則某廣言之子。蓋公生、生髮未乾、從母氏畜於惟宗氏、冒惟宗姓、是以頼朝下文及島津氏藏東鑑皆稱惟宗某、嫌於廣言之子。而吉見系圖遂以公爲廣言之子誤也。且島津氏家傳殊無公爲廣言壻之說。而大日本史引島津家傳以爲云云則益繆矣」。

頼朝から兵衛尉に任ぜられたことの註に曰く「前史氏『島津世家』の編者郡山遜志のことであらう」謂、源頼朝開府時、愛惜名器不妄假人、且如北條時政和田義盛畠山重忠梶原景時之徒、並爲當時功臣、而時政稱四郎義盛稱小太郎重忠稱次郎景時稱平三、皆未叙爵。乃若公則今年纔七歲、即叙左兵衛少尉。蓋頼朝所以寵異公者固非他人之可比矣。此說得之。」(此論の評は他項を見よ)。

右に引いた『島津國史』の忠久説は、簡略を旨とするためとはいへ、舊傳説の中の極めて怪むべきものを大に削つた形跡が明かである。今一々指摘するには及ばない。しかし藩廳の試みた改削洗練の一點だけを茲に掲げて之が例證として見たい。初め傳説は忠久を頼朝の第三子とし、道聖も、聖榮も、一一八九年頼朝自筆書狀も(もし之をも一證と見得るならば)又此等を襲用した諸記(本田系圖を含

む)も、三男といひ三郎といつた。然るに一一七九年に生れたと稱する忠久を更に後生の頼家實朝に次ぐ第三位と見るのを見て惱み、考量の末に、是れは忠久が年長なるにもせよ庶腹の故に正腹の二子の下に置いたに過ぎない、實は頼朝の長庶子とすべきものであると説明し、『島津國史』にもさう記入した。(松下氏は、忠久以前に頼朝が伊東祐親の女の腹で一子を生んだといふ傳説を顧み、本堂家が之を祖先と唱へるを見て、それが實ならば忠久は長庶子の地位を失ふべきことを憂へて居られる)。此「三郎」の名と長庶子との位次の煩悶を露出するとても云ひ得べき適例は一七〇一年の出來事である。此年に林信篤は忠久を長庶子とすることの證據を綱貴に問うたといふことである。これ一方に三郎、三男とあるを信篤が知つて居た故ではあるまいか。綱貴は藩の學者に一一八九年の自筆書狀の句解と一篇の略譜とを爲らしめて信篤に示し、信篤は感服して略譜の序と句解の跋とを草し、かくて兩本が聖堂に獻ぜられたといつてある。余は句解の全文を見ないが、多分漢文を以て假名字を譯解し、忠久が三郎といはれながらも實は長庶子であることを示さうとしたのであらう。

源姓を冒す——第十五世紀前半の安國寺申狀には信濃島津家が近頃源氏を唱へ出したやうに書いてあるが、果して公文書にも之を用ひたかはわからない。薩摩では既に頼朝説が在つても昔から久しく用ひ來つた惟宗及び藤原の姓を捨て、公けに源姓を冒すことは敢てしなかつたらしい。而も江戸時代の初に至つては、將軍家が源氏と稱した故でもあらうか、島津家は大膽にも公私共に源姓を用ひるこ

とになつた。その前に試みたことは見當らぬやうである。松下氏(三一)は『東朝高僧傳』の中の一三九三年記錄に島津大道士源元久云々とあるのを引かれる。元久は一三六一—一四一年間の人ではあるが、此書は一七〇二年に編したものであり、その引いた記錄の品質が不明でもあり、又公文書であるとも見えて居らぬ。徳川の世となつてから久しからずして島津が源姓を稱したことは藩の記錄にも光久元服の時初めて見えるといつてある。其元服は或は一六二四年十月二十四日といひ(西藩野史一七、御系圖、元服調)、或は一六三一年八月一日ともいふ(西藩野史二)。(松下氏三一は此矛盾を解いて前のは光久九歳の時の初元服で後のは再度のであるといはれる。後者は即ち秀忠の前で冠禮を行つた時であらう)。重野は寛永に幕府が系圖を徴した時に源氏を名乗つたといふ。林道春が『寛永諸家系譜』を編したのは一六四一—一三年のことであるから同じく光久の時である。(之によつても道春の孫信篤が上記の如く一七〇一年に源姓の理由を訊ねた事情が解せられる)。何れにせよ系圖を上つた頃又はやゝ前より光久が公式に姓を改めたことは、朝廷の任官叙位の口宣に、一六二六年には家久を藤原としてあるのに反して一六三一年には光久を源とするのを見て證せられる。(太田氏の大辭典二八六〇頁には『續譜』に家久が藤氏より源氏に復姓しようと思つた際、岡らずも光久の任官宣旨に源姓を用ひたのを見て意の如くに改めたとあるのを引いて、これは一六七三年上洛中、中將に叙された時のことだらうといつて居られる。しかし一六三八年に歿した家久が、我子の一六七三年の宣旨を見た

筈がないのみならず、偶然に我子の宣旨で此事を発見したことも、朝廷が創意を以て藩の傳説を採用して從來の藤氏を改めたといふことも、受け難い所であるから、何かの誤記であらうと思はれる。一六七三年の宣旨は一六三一年のと同様島津家の稱へる源姓を用ひたに相違あるまい。従つて又太田氏が貞享武鑑から源姓が始まつたやうに云はれるのも遲きに失する。

島津本家が急に源姓を用ひた結果、從來久しく惟宗、次に藤氏を稱し來つたことに矛盾が生じたは自然のことである。『西藩野史』二には此時以前に分れた支流は猶ほ藤姓により、以後に分れたものは源姓を冒したといつて居り、太田氏は筑後守忠徹の家は一七四九年久柄に至つて源姓を稱したことを大成武鑑によつて指摘される。而して越前の島津家は何時までかわからぬが古い惟宗姓を用ひて居たといふことである。藤姓の由來は下に論ずる所であるが、或はその起原が忠久個人が基通との親しい關係があつたことにあるが故に、嫡流ならず早くから分岐して遠國に在つたものゝ如きは(信濃のが久しく源氏を稱した例を除いては)源姓は勿論藤姓をすらも用ひなかつたのもあらうか。(越前島津は忠久の次子忠綱に發した。前にいつた歌集に見える忠景、忠宗、忠秀は忠綱の子、孫、曾孫である)。既に公けに頼朝落胤とし源姓とするに及んでは、鎌倉の頼朝の墓に參る慣例の生れたのも亦自然である。松下氏(四七—五二)によれば一六三六年以後度々墓參の記録があり一七八五年以後の如きは殆ど毎年見るとのことである。頼朝への墓參は其傍の忠久の墓なるものに參ることを兼ねるのであ

る。此忠久墓なるものは一八四〇年に編成した『新編相模風土記』には「疑ふべし」、鎌倉の舊記には見えない。今在る碑は重豪一七七九年「建之」とあるから、古墳を修めたのではなく、此に頼朝の碑ある故に、新たに造つたのだらうといつてある。然るに一八一四年頃に小川顯道の草した『塵塚談』には、彼が一七五二年頃に實見した時は頼朝の墓は三尺許の苔むした五輪であつたのに右の重豪が一七七九年に之を八九尺の五輪に「建替」へて、東方三十間奥にあつた忠久の墓をも「同時に建直し給」うた、諸人の教訓ともなるべき質素な古墳を態々造り直したのは「餘り心なき事ともいふべし」と嘆じて居る(松下三七—三九)。之によつて見れば松下氏もいはれる如く忠久墓は一七七九年初立てはあるまいかと思はれる。然し町田系圖に忠久歿した時から在つたといふ如きは後世の假説に過ぎない。小川の實見した小五輪が何時から在つたか知る由がない。さて一八七四年に至つて久光は二墓周圍の地面を買収して島津家の所有となして了つた。松下氏が之を祝して、かくて頼朝との父子關係が歴史的にも法律的にも不動確固となつたといはれたのは泰平樂である。legitima possessio corpore et jureではなく fabula et jure!

頼朝説を疑ふものと改めるもの——島津家が公然此説を主張するに及んでは、少くとも藩内には遍く信奉されたのであらうが、猶ほ或は全く之を疑ひ、或は幾分之を改めんとする者がなかつたのではない。太田氏の引く續譜には頼朝の子といふことが印本の『尊卑分脈』のみに見えて其古寫本には見

えないと聞くが「如何なる子細あるにや」と疑つて居る。『地理纂考』五には高倉宮落胤を信ずるために頼朝説を疑ふ。『薩藩史談集』の中に重野は傳説を疑ふとは明言するを避けて居るが、新井白石が島津大友本堂の諸家が皆頼朝を祖とするを怪んだことを引く。松下氏は固より頼朝説の忠誠な主張者であるが、宮落胤説や本堂系圖の存在を顧み、殊に丹後局が頼朝より十三年の長であることを見て、此難を切り抜けやうと焦心された。是れ氏の母子兩局説ある理由であるが、前にいつた如く、もし丹後内侍の年齢を『西藩野史』の一説に基かず、季安のいふ如く一一四六年頃に生れたとすれば、一一四七年誕生の頼朝の妾として差支がない。『雲遊雜記』に局が頼朝より一年ほどの長だといふのが松下氏よりは正當に近いであらう。頼朝説の難はかゝる薄弱の點に在るのではない。又上井家藏の執印系圖が忠久を頼朝の子と認めながら局の兄安友はた康友が之を養ふとしたといふの類は取るに足らぬ妄説である。藩内ですら右の如くであるを見れば、局外の人が島津家の主張を顧みぬ者の多かつたことは推し易いことだ。『臥雲日件錄』は忠久を義朝の子と稱へ、現版の『尊卑分脈』一〇には頼朝の子息の中に忠友を擧げず、『大日本史』も此説を斥け、『藩翰譜』にも疑を挿み、本堂系圖は頼朝が伊東祐親の三女に生ませしめた子といふものを家祖と稱する。近世の史學者は多くは忠久を廣言の子とすること後節に見るが如くである。

余も亦不幸にして此傳説を疑はざるを得ないことを憾む。故に左に聊か所見を開陳して識者の批判を仰ぎたい。但し豫め明言すべきことは、忠久の父母については當代の證記を缺くが故に積極的に傳説に代ふべき事實を提供し得ないことである。信じ得ぬことの證據よりもむしろ其理由を言ひ得るのみである。

一、年齢。當事者三人相互の間の年配は松下氏の患へられるやうな不調和が無く、又は少い。先づ頼朝と内侍との年配が折り合ひ得ることは既に述べた如くである。次に頼朝と忠久との間も亦甲が一一四七年の誕生であり、乙が一一六五年前の頃であるらしい故に、父子關係に無理がない。只内侍と忠久との年配は少しく難がある。内侍が推定の如く一一四五年前後に生れたとすれば一一六五年頃に忠久を生み得るけれども妊娠期を顧みれば内侍はその前年から既に伊豆に居たとせねばならない。さらば内侍は一一六四年以前に數年宮仕して内侍にまで陞つた事となり、やゝ若年に過ぎるやうにも思はれる。又一一六五年二條院崩御の後猶ほ宮に留まつたといふ説と符合せぬ。但しこの滯京は傳説に過ぎず文證の無いことであるから、既に去つて伊豆に還つたといふことが不可能とはならぬ。まして忠久が他の父によつて京都で丹後の腹に生まれたとすれば猶更に滯京説すらも不都合がない。しかし最も注目すべきことは以上の年配調和は只々母子兩人の生年の藩説を改めてのみ然り得るものであることである。もし説の如く局が一一三四年、忠久が一一七九年の誕生だとすれば、頼朝三十三歳局四十六歳の子となる。是れ松下氏を惱ました一點であらう。しかも一一七九年説が八方に矛盾を生ず

ることは初めに論じた如くである。

二、當代記録の沈黙。 忠久が頼朝の私生兒だとは當時に一つの記事も見當らない。『東鑑』は次項に見る如く頼朝の密通と私子とを憚らず記録するが、内侍との交情を語ることなく、只其病を憂へて訪うたことを云ふのみである。又忠久の名だに頼朝一生の間には記されず、頼家の時に至つて始めて見えることは既述した通りである。重要な一一八五年の會見、元服、任官の記もなく、一一九〇年及び九五五年再度の上洛の供奉人の交名にも忠久は加はらぬ。勿論前者は脱漏であり得、後者は家傳にも見えず忠久在國の故たり得るが、夙くから傳説の中に重要な地位にある一一八九年征奥從軍の事が、何故に『東鑑』の詳しい六月九日、七月十九日の交名にも、七月十七日の配軍の記事にも片影を示さぬのであらうか。前に言つた如く、沈黙は否定でないにしても、此詳記の中に一方の將軍の名を漏らしたことは、細事の無言とは同日に談じ得べからざるものでなからうか。此點は積極の證なきことそのまゝに恐るべき消極證を形成するとさへ見得る。又一二〇三年九月四日忠久の能員縁坐の記にも片句だに頼朝の私子たることをいはぬのも注目値する。一二二七年忠久死歿の事を何處からか拾得した『東鑑脱漏』には、此場合に云ひさうな頼朝との父子關係を語つて居らぬ。概して當代の他の材料ならば頼朝傳説を云はぬ理由は首肯し得るものがあるが、當然此事を何處かで記すべき筈の『東鑑』が全篇に黙々たることは説明し難いといつてよからうと思はれる。

三、傳説の發生が遅い。 前に縷述した如く、此説は第十三世紀半に近く起つたといふ系圖相論の記事には未だ出現せず、只第十五世紀初頃から道聖、安國寺、聖榮の記と、信濃島津家傳とに其存在を證し得るのみである。且つ其後も猶久しく傳説は浮遊變移の状態に在り、次第に成長の道程を経て、侯家が公けに採用し源姓を稱へ家系を編し始めたのは第十七世紀初半以後である。皆是れ傳説の比較的遅く出たことを傍證する事實である。廣言を養父に改めて攝入し、之を南に下らしめたのも亦その一證と見得る。

四、傳説の譚話的性質。 凡て古今を問はず東西を論ぜず、legends の特徴は、批評力の幼い人々が長時間に亘つて次第に傳承し變改し補加して遂に辻褄の合はぬ事柄を多く藏する譚叢となること、及び其中に理論又は疑問を交へず飽くまで人情的、具體的で、幼い心が把握し口傳し得べき細事を包んだ話説となることである。頼朝傳説も亦(その諸分子の一々の發生期は知り難いにせよ)正しく此の如き徑路を經、此の如き本質を具有することを歴々として露出する殆ど模型的產物である。單にその中心點たる住吉出産の一齣のみを見ても分明であらう。數世紀間、藩廳で制限を加へることなき間に、代々の諸人が想像を擅まにしたのである以上、幼い譚が枝に枝を生じ、葉と花と實とが加はり、前説の矛盾を正す暇もないうちに後説を加へ、或はよく前代の話を知らずに勝手の方角に馳せ出し、或は之を無器用に新話に縫ぎ合はせる。第十七世紀藩廳がその淘汰整理を試み始めた時には既に收拾

すべからざる紛糾の狀に在つたのであらう。本質既に此の如くなれば、如何に之を鍊つても刻んで、もはや泥塊から黄金を抜き出だし得ず、辛うじて塑像を作り得るのみである。されば整理の成果も亦猶ほ具體的、非理性的、自家問答的の本性を傳へ、矛盾の満ちた譚話たるを免がれなかつたことは、前に引いた『島津國史』の藩撰の説體を見て明かである。その矛盾は全體の内にも、諸分子の間にも、此等と史的事實との間にも、隨處に發見され枚舉に遑のない程に多い。

試みに手近い矛盾の一二を指さう。生年を何故か知らず一七九九年晦日としたことが一の根本の惱みで、之から數多の難が一生を通じて生じ來る。殊に幼少の愛兒を難治と稱する遠き大國に守護として下らせ、又遙かに奥地征伐の一將たらしめる。一一八五年頼朝が忠久を兵衛尉に任じたといふのは、頼朝に朝官補任權を賦與して、殊に満五歳以下の童に向つて此權を濫用せしめたものである。又次に彼を島津庄下司職に補任したといひ(たとひ領家の下文によるとはいへ)、又領家が頼朝の補任に任せて同職を付したといふは、近衛家が此大庄の本家權を頼朝をして表面に立つて行使せしめた奇事である。又母子を廣言に與へた者は基通か頼朝か充分明かでないが、もし頼朝とすれば何の緣由あつて京人に伊豆の局を送り與へたのか不思議である所から、廣言を鎌倉武士として扱つたものもある。又此與へた時は何時であるかを終に語る所がない故に盛長が跡なく消え去るのである。此等は無數の矛盾の中から、正統傳説の内に含んだものゝ一小部を擧げたのみである。いふまでもなく、凡ての形

における此傳説の根本的大矛盾は頼朝をして内侍に通じて忠久を生ましめたことに存在する。此根本が虚誕なる以上は築ける塔が地盤から既に全部矛盾を以て固めたものたるを免がれない筈である。此點を次に説かう。

五、頼朝と島津家源頭との汚濁。系譜を修飾して源泉を高處から引かうとする試みは、族制を重んずる日本の美質の反面に横たはる甚だ普遍であつた現象である。恐らくは支那を除いては日本の如く多分に此反面を示し得る國は稀であらう。昔は諸方で殆ど常事の如く此修飾を企てた結果、恰も當然の事のやうに見做されて、人が之に對する良心の痲痺したかの觀を呈して居る。又他方日本の社會史上否み難い事實は畜妾、庶腹、乃至私生兒が中流以上の殆ど尋常事であつたことである。而も頼朝忠久の傳説は此等普在の事例の倫類を絶した分子を含むことが一考すれば明白である。盛長を默葬したことの如きは、むしろ頼朝よりも廣言に關して生じた矛盾であり、比較的罪の少い小事である。惡竦の點は盛長を無言の裡に埋め去つたことよりも、頼朝をして彼の妻を姦せしめたことである。一七九九年内侍が伊豆に在つても、未だ盛長の妻でなかつたと明言せぬ以上は、是れは一樣の有夫姦にはあらず、驚くべき卑劣の姦通である。盛長は頼朝の流謫時代以後誠實に勤仕し、異常の勳功あり、他に超えて頼朝に親信され、交懼し、且つ恩を知るに篤き頼朝に對して特殊の恩義ある比企尼の長女を娶つたといはれる人である。後年政子が其子景盛について「有其寄、先人殊令憐愍給」といつて頼

當、母伊達藏人賴宗女とし、別に賴朝子僧能寛、權大僧都、高野に住して自殺したとしてある。「東鑑」には貞曉をも高野法師といふ。此故であらうか『大日本史』の賴朝傳の註には此二僧は同人かと疑つて居る。それはどうであらうとも此處の論旨には重要な問題でない。(貞曉の事は更に『東鑑』『明月記』などを檢せよ)。

賴朝の情事は政子の前に伊東祐親の女と通じて千鶴を生んだのを祐親が怒つて「ふしつけ」て殺した(盛衰記一八)といふ話もあり、而も本堂氏は之を祖先と稱する。政子自身も亦賴朝と密通して後に兼隆に妻はせられたのを、忍んで賴朝の許に行つたといはれる(同上)人であるが、賴朝に對する獨占の心の盛んであつたこと、賴朝が頗る彼を憚つたことは右の諸件を見ても察しられる。しかし『東鑑』の示す實例は政子が孕婦を殺すほどの夜叉女であつたことを證しないことは見逃がし得ぬ。

二、賴朝が丹後内侍の病のために心願するほどに親切であり、又之を「潜」かに訪うたことは、情交と政子の嫉妬とを證するに似るが、果してさうであらうか。前に論じた如く、内侍が安達盛長の妻であること、其の甘繩の家は即ち盛長の住宅であることは、事實である。しかし密訪が政子の妬であるならば『東鑑』は、他の情婦の記事から見ても、此處にさう説明してあるべき筈と考へられる。實は政子は(後に賴家の時に能員の北條に對する陰謀を企てた以前は)極めて比企一家と親善であつて、度々賴朝と相俱に又は單獨に能員の家を訪ひ、往々こゝで歡樂した。一一八二年政子が賴家を産

んだのは能員の家で爲したことであり、其前後三ヶ月以上此家に靜養した。政子は又その嘗て殺さうとした憎むべき女の現在せる筈である盛長の家をも時々訪うた。賴朝が内侍の病を訪ふより五ヶ月前に、賴朝と共に甘繩明神に參つたついでに盛長の家に入り、一一九四年九月にも同様の記事がある。賴朝の歿後、賴家が盛長の子盛景の愛女を武力を以て奪はうとした時には、政子自から盛長の家に入つて此暴行を妨止し、賴家を誡めて景盛が賴朝の「殊に憐愍」した者であることを言つたことは前にも示した如くて、此時の諫詞には、罪あらば先づ尋究すべき筈なるに事を問はずして誅するは後悔の基であらう、「若猶可被追討者、我先可中其箭」とまで言つてあり、其翌日まで同家に留まつた。此等の著しい事實は政子の激しい妬情の説と全く齟齬することは云はずして明かでないからうか。もし政子の安達家に對する懇切が一一八六年訪問の時既に内侍が死んだ後である故であらうといふ者があらば、さらば彼女が廣言と共に南に下つて八十餘歳まで生存した傳説と矛盾するを免がれない。賴朝自身は現に一一八六年政子より後に同年内侍を訪うた。されば其説に彼が潜かに渡つたのは政子の妬のためと斷すべき理由がない。此時は忠久が二十餘歳になつて居た筈であるから、今までも、更に三年後北征の時までも、政子が怨念に燃えて居たとは信じ難い。賴朝が内侍の病氣を心配したのは比企安達に對する特別の友情を以て説明するに餘りある。

以上は『東鑑』の記事を以て政子の内侍に對する嫉妬なるものゝ根據とし難いことを論じたのであ

るが、多分傳説の初めに當つては未だ此書に據つたのではなく、單に人口に膾炙した政子の一般の妬心を利用したのであらう。後に至つて『東鑑』を知るに及び其の記事が都合よく傳説を證すると思つたのかも知れない。何れにせよ、内侍に對する政子の怒りは頗る疑ふべきことに屬し、實に賴朝私通の説を確める力がないのみならず、妬情を土臺とした凡ての譚話が悉く崩れ去らざるを得ないと信ずる。

猶ほ賴朝傳説の中に重要な地位を有するものは忠久と畠山重忠及び近衛基通との關係の話である。

重忠との關係——是れは元服、命名、入聲の三事を中心とする。元服、命名は山田聖榮は一一八九年奥州征伐の時とするが、更に後の記録類には四年前鶴岡見參の時とする。しかし重忠が烏帽子親として忠久の名を興へ、一女を妻はしたといふことは皆一致する。進んで『西藩野史』の二及び一〇は之を第六女とし本田親恒女を母とする者とし、重忠の妹が廣言の先妻だとして居る。勿論此等の説は賴朝が政子を憚るために命令して爲させたといふのであつて、忠久が賴朝の私子であるといふ根本の點を強めるためのものである。然るに上に云ふ重忠の三事及び廣言前妻の事は『東鑑』其他當代の記録に證據の見えぬことである。

この外に島津家には一一八九年八月十五日、奥州征伐の最中に賴朝が重忠に與へた自筆の假名書狀が在る。定めて『大日本古文書』の同家文書の中に出版されるのであらうから、其全文を引くことを

省くが、文の本旨は、明日國府に近く宿陣するについて、今日狼藉の在つたことを責めて、新たに僻事のなからんことを誠めるに在る。然るにその中間に突如として「あかう所三郎をやう々々にせんにこひたるものゝついふくしたるなり」の妙句を挿む。是ぞ即ち一七〇一年綱賞が林信篤に示すために記録奉行田中國明をして句解を作らしめて、忠久が賴朝の庶子であることの證據としたものゝ本文である。賴朝の書狀なることは疑なく、又宿陣の日取も大體『東鑑』に合するに似る（同書には十二日に多賀國府に到着したが十四日から此處を出て數處に轉戦して二十二日に平泉に着いた。此文書に見える十六日の動靜は此書に記されない）。しかし引いた一句の意義が不明である。句解は「若所三郎を漸々專に請ひたるものゝ付副としたる也」の義に解し、松下氏は付副を追副と改め、『島津國史』は之以て重忠に忠久の調護を囑したことにする。全文が賴朝の自筆である文書の現に傳つてあるものは恐らく少數であらう。『東鑑』には此年四月二十一日彼が自筆を染めて書いたといふ院宣請文の假名書を引く。その他自筆とはいはぬが自作と見るべきは一一八五年正月六日範賴に與へた二書狀、八七年四月十八日盛時奉書下文の端に加へた數行、又八五年四月十五日内舉なしに朝官を申請した御家人等への下文に付ける一紙に各人の名の下に注した痛罵短句の如きが、それであらう。何れにせよかくも稀有貴重な自筆狀が世に現はれるに至つたことは學界の爲に祝福すべきことである。而も上に引いた一句は果して忠久を指すのであらうか、藩の訓み方は果して正しいであらうか「あ」と「わ」と「吾相

通」ずる故に「若う所」と訓むならば、かゝる熟語が當時存在したことを證さねばなるまい。もし又付副、追副など、訓めば、傳説と反して、今、陣中で始めて懇請の結果忠久を重忠に付したといふ矛盾を生ずるであらう。もし假に空想を馳せるならば此一句は忠久の事ではなく或る敵人のことであつて、「前に」頻りに降らうと乞ふた者を「遂(に)服したる也」とでも解し得る。「あかう所」はアカウンで赤鷲又は赤鸛だとすれば東北人に在りかねぬ異名でもあらう。これは根のない話であるが、とにかく此一句が忠久であり頼朝の子であり、重忠の烏帽子子及び婿であることの證としては頗るはかないものである。専ら今日の狼藉と明日の軍紀とを語る文の只中に、一敵人の新たに歸服したことをいふことは在り得るとも、我が愛兒を特別に重忠に附屬することをいふは奇妙である。もし外に忠久が頼朝及び重忠に親しい關係があつたことを信じた眼で讀むのでなくば、さやうな訓み方は在り得ないであらう。而も此關係に他の確證の無いことは前述の如くである。最も知りたいことは島津家が何時、如何にして此文を得たかにある。安國寺の久時政家相論の記事には久時が此文書の内容を知らなかつたに似、安國寺自身も之を云はない。聖榮も知らない。一七〇一年には在つたが、伊地知季安は前に『薩藩舊記』に之を編入しながら、一八六五年には此文を頼朝私生兒説の實證とは見なかつた故に以仁王落胤説を他證によつて修飾したのであらう。もし假に推せば、江戸初期頃に此文書が島津家の手に入つたのであるべく、寛永頃源姓を公稱したのは之を根柢の證としたのであらう。果して然らば久

しく頼朝傳説の成立して後に入手して、其心で此文を讀み、之を金科玉條としたのであるまいかと考へられる。

抑も畠山家は河越家と同じく武藏の秩父平氏の流で、殊に河越家と近く、同家の相傳職である武藏國總檢校職に重忠が任ぜられたことがある(東鑑一二三一年四月二日の記事)。かゝる名門である上に北條時政の甥であり(同書一二〇五年六月二十一日條)、頼朝にも信認され、又その人物、操行、及び悲慘の末路の故に長く史上に一般の同情を留めた人である。従つて重忠との家族關係を誇り傳へるものが島津家の外にも數家在るであらう。たとへば太田氏の『姓氏家系大辭典』(一、一二三)に引く『元和書上』には一一八九年頼朝奥入の時に案内した二本松二郎三郎なるものが頼朝の命令で重忠の末子を甥としたなど、いつて居る。然るに忠久が重忠の甥ならば、やゝ怪しむべき事は、『東鑑』一二〇五年六月二十二日重忠を二俣河で攻討つた幕軍の中に河越重時、重員、安達景盛の名が見えることである。此三人は忠久の母といはれる丹後内侍の二妹を母とするといはれるものであるから、即ち從兄の舅を討つたに當る。殊に河越二人に取つては同流の人を攻めたのである。但し何れもやゝ遠い縁でもあり、且つは將軍の命令による大義滅親の例だといへばそれまでであるが、更に怪しいことは重忠一門が誅されても忠久が何等連累したことの見えぬことである。

重忠傳説の起原は多分忠久といふ名である。廣言又は頼朝の子といふものが此名を持つての奇なるを

説明せんためであらう。之から先づ重忠の元服及び命名が按出され、次に同じく政子の妬によつて其婿としたといひ、更に廣言及び親恒と重忠との戚縁が副次的に發明されたのでなからうか。自筆狀は東鑑などから奥州征軍の日程を知つて後に現はれたのでもあらう。果して然らばこゝにも傳話發展の模型的徑路が見られる。

抑々忠久と呼ばれたのは何故であらうか。實父母の不明な人について此由來を推すことが出来ないが、面白い事は、藤原氏近衛氏に忠の字を名に入れた者の多いに拘はらず、次段にいふ如く前半生に京に在つて彼等に庇護されたと見える忠久が、彼等から名を與へられたといふ傳説の生まれなかつたことである。基通の猶子となつたとはいふが、既に頼朝及び重忠關係の説が充分の満足を與へる故に、忠久の名を藤氏から導き出す必要が無かつたのであらう。もし此便利な説が無かつたらば如何と好奇心が提問し得る。これは無益の言であるが、茲に一層適切な問題が在る。既に一言した如く、『三長記』一一九八年初の除目交名の中に忠久の外惟宗を姓とする以忠忠成の二人が見える。是れだけでも惟宗氏に元來忠の字を負ふ者が在つたことがわかる。之によつて忠久、殊に彼より長年で重忠と無交渉の兄の忠康の名は、敢て重忠の元服入聲や廣言先妻畠山氏などを擔ぎ出すまでもなく、單に惟宗氏である事實のみを以て説明し得られぬものでない。忠久の弟忠季を始め後世の一族に忠の字の甚だ多いことも、歌集に見える忠景忠宗忠秀も皆同じく説明し得まいか。

基通との關係——島津家傳の基通關係の諸種の譚は殆ど皆頼朝傳説を基として出來たものといつてよい。一一八〇年元旦住吉に偶然來合はせて母子を京に携へて養つた、忠久下向の時に直衣の菊闇を紀念として取つた、後に一一九六年か一二二一年かに忠久を猶子として桐牡丹の紋を與へ藤原姓を冒すを許した、などの話は凡て頼朝私生兒説と運命を共にする。攝政が元日早々外出社參したことは有り得べからざる異例と思はれる。猶子としたことは他の理由を以てしても頗る疑ふべきのみならず、近衛家系の證せざる所であることは勿論である。桐牡丹紋は十字紋と共に『蒙古襲來繪詞』に明かに用ひられて居るが、忠久の時から用ひたかはわからない。藤姓は忠久が一二二一年文書に用ひたらしく見えるが、猶ほ其後久しく惟宗氏を並用して居る。但し一旦藤姓のみを公稱するに至つた以後は、源氏説が既に起つて繁茂して行つた久しき間も之を保ち、棟札、願文等は一六〇七年までも然ることが見られる。此姓を基通から忠久に與へたといふ説は『島津國史』でさへ不明としてある。太田亮氏は多分菊池家と同じく本家領家の姓を冒したのだらうといはれるが、或は之に加へて、次項に見る如き庇護關係の故かも知れぬ。猶子説の如きは藤姓を稱し始めてから久しい後に後代の人が此事實に基いて唱へたのでもあらうと考へる。

余惟ふに、忠久と基通との關係も亦頼朝傳説による住吉の偶會を假らずして充分に理會し得る餘地がある。但し之を論ずるに先だつて、之に關する問題の形を限定するのが便利であらう。

忠久については正確の原料によつて疑を容れない事實の中に下の三箇が在る。忠久が惟宗氏を稱したこと(三長記一一九八年正月末日)、一一九七年に既に島津庄過半の地頭であつたこと(三國建久圖田帳)、一二〇三年以前に三國守護であつたこと(東鑑同年九月四日)。しかし忠久が惟宗氏である上に廣言と丹後内侍の子であつたことの證し易からぬことは前に説いた。島津庄の地頭に補任された次第を考へるに、島津家に傳へる一一八六年八月十七日及び十月十八日の頼朝及び領家下文が彼を庄の下司職としたのは眞文書か否かを斷ぜずとも、其後に頼朝がかくまでの大庄に忠久を地頭たらしめたのは單に一通りの口入を以て庄に載せかけたものとは考へられぬ。頼朝が往々御家人の庄園下司職を持てるものを、このまゝに其地頭に任じたことが在ることから推して、忠久の例も亦既に又は新たに本家から或る庄職を興へられたことを基とすると見てよからうと思ふ。さらば問題は何故に近衛家が本家に宛行ふまでに忠久を重く用ひたかといふことである。而して直ちに之に伴ふ第二の問題が在る。頼朝が忠久を大庄に口入して地頭としたのみならず、三國の守護たらしめたのは、後代は措き、當代においては多くの御家人の中にも稀に見る特恩である。『東鑑』には北條家を除いては三國の守護たるものは此頃に佐々木定綱が見えるのみ(一一九三年十二月二十日條)であるらしい。佐々木一族は相傳領佐々木庄を棄て、初めから頼朝に奔り仕へた大功がある故に定綱以下兄弟五人が十七國守護であつたこと(一二六一年五月十三日條)も解し得る。忠久の母とされる丹後内侍の夫安達盛長すら

只一國の守護であつたと見える。頼朝がかく忠久を重用したのは何故であるか。(前に引いた『島津國史』の文は忠久を頼朝が左兵衛少尉に任じたことを信じて之を寵異無比と稱したが、頼朝がかやうな權力を持たなかつたことは前に評した如くであり、且つ同じ一一八五年に尉官であつた御家人は『東鑑』に見えるものだけでも此外に數人ある。四月十五日條の十餘人は頼朝の推舉なしに申請したものであるから、之を除いても、十一月七日の御堂供養に隨つた者の中に八人ある。其前十月二十四日の供人の中に五位六位三十二人あり、其外に頼朝の舉申によつて國司たるものも數人あつたことは人の知る如くである。尉官は此外にも在つたらう。但し此頃には猶ほ御家人の任官は甚だ多からず、次の世紀、殊に京貴及び親王を將軍として仰ぐに至つてから濫任されたことが證し得られるから、一一八〇年に忠久が『玉葉』に見える如く既に兵衛尉であつたことは一一八五年頃に御家人となつた時の彼に取つては光榮と稱すべきであつたらう。大功ある義經すら左衛門少尉檢非違使であつた。しかし忠久は頼朝から任官されたのでなく、彼の舉申によつたのですらない。こゝにいふ頼朝の重用は朝廷の任官を指すのではなく、御家人となつてから後に、頼朝の權限内で一大庄及び諸處の地頭、三國の守護とされたことをいふのである。)

忠久を廣言及び内侍の子と信ずる或る人々は、忠久が島津庄地頭となつたのは廣言一流が前代から九州に縁故があつた所から此處の庄官をも兼ねて之を忠久に傳へたことに基くであらう、又彼が守護

となつたのは母内侍の比企家が頼朝と親密であつた故であらう、即ち地頭たることは父方、守護たることは母方の縁によるのだらう、と想定する。太田氏は之を『藩翰譜』の頭註と内藤の説とに近づけて居られる。敢て之を評すれば、此説が輕々に廣言及び内侍と忠久との骨肉關係を事實と先定することは姑く問はずとも、何故に其假想するやうな(忠久に傳へ得たやうな)大なる職を近衛家から廣言等に島津庄に興へるに至つたかを説明して居らぬ。平氏の如きは近衛家と密接の關係があり、清盛の第三女は其實の後室となり、第五女は、其子基通の妻であり、平氏が京都を出奔した時は基通をも伴ひ去らうとした程の間柄であつた(平家物語一)。且つ島津庄についても、基實後室は一一六六年夫の薨じた後に、基通の幼い間其本家權を攝した(東鑑一一八六年四月二十日條、三國名勝圖會五八)。然るに之に拘はらず、平族にして實際に島津庄内に諸職を知行し又は横領して居たものは、數は少ないが何れも小さい領で、此説が廣言等から忠久に傳へられたといふ如き總職を持つた者の無かつたことは、頼朝の時の現領と沒收地とを見て知り得る所である(三國の岡田帳、若干の文書及び記録)。惟宗家が忠久以前に此庄内で平家にもまして本家に信用されたといふ證が何處に在らうか。又もし此事あらばそれは何故であらうか。

以下の余の所論は、當代の證據の全く無い廣言内侍説を省いて上の二問題に答へ得ざるかを尋ねんとするに過ぎない。故に余の説も亦直接の證を缺く推測であつて、或は然らんとはいふべき方向を指示するのみである。

近衛家に重用された理由——惟宗氏が勿論早くから藤原氏の庇護を受けて居たらうことは、具體的に證し得べきことかも知れぬが、證を求めるまでもなく自明の事實と認めて差支なからうと思はれる。さうでなくば彼等が少くとも王朝後半には京及び地方に大いに任官し得た筈がない。其太宰府及び九州諸國に官職を得たものも多く且つ久しいことも必ず此故でなければならぬ。孝言から廣言まで三代日向に國職を持つたことは勿論、孝言が頼通の師、基言が師實の師であつたといふことが實ならば、猶更に關係の親しさが想はれる。忠久も亦、たとへ廣言の流に屬したことが證せられぬとしても、惟宗の一人として藤原氏殊に近衛家の恩顧を被つたことが其島津の大庄に或る總職を得たこと(上見の如く)ほゞ證されるによつて直ちに推し得る。伊勢、信濃の諸處にも頼朝から地頭職に補任されたのも亦それぞれの領家から宛行はれた庄厨の職を土臺としたのかも知れない。一一八〇年に左兵衛尉(玉葉同年五月六日)、一一九八年に左衛門尉(三長記正月三十日)、檢非違使、一時の賀茂祭主たり(新後撰集)、又年が誤つて記されたにもせよ或時に播磨少掾となつた(除目大成抄)等のことも、又『東鑑脱漏』(一二二七年六月十八日)に彼が從五位下、豐後守とあることも、同じく近衛のやうな高家の推舉によつたのであらう。(前に度々いつた如く一一八五年に頼朝が忠久を兵衛尉に任じたといふは妄説であり、少くとも五年前から彼は此朝官を帯びて居た)。恐らくは忠久は基通の通り一遍の門

下ではなく或は一時其家に侍仕したのでないかと考へ得るまでの恩顧と見える。とにかく彼の鎌倉に來つて頼朝に仕へたのが何時であるか分らぬとはいへ、其時既に少くとも左兵衛尉であつたらしく、或は又諸庄の職をも知行して居たかも知れぬ。この來仕を早くとも傳説の如く一一八五年頃とすれば、忠久は二十幾歳の成人であり、其れ以前は京の一公子であつたとせねばならぬ。加之、一一九七年には既に島津庄大半の地頭となつて居たけれども、猶ほ一面は御家人たるの傍ら近衛庇護の下から離れなかつたと思はれる。何となれば翌年正月彼が左衛門尉に任ぜられた時は、同時の除目交名の中頼家の外別に鎌倉武人らしき名を見出し難いことから推して、忠久の任官は單に頼朝の舉申によるにはあらず、權門の庇護も亦在つた爲であらうと察し得るからである。之から猶ほ進んで考へれば、島津系圖に、承久の役に忠久の弟忠季が關東方として討死したとは反對に其子忠經が京方として戦死したと記してあること、歌集類に忠經の後たる忠景、忠宗、忠秀が見えること、『東鑑』にも忠經、忠景、が蹴鞠の名人として現はれ(一一五七年四月十五日、六一年正月十日)、中にも忠景は特に將軍宗尊親王に近侍し(一二五七年十二月二十四日、六〇年正月二十日、六五年七月三日、其他)、親王が將軍を罷めて京に歸られる時に供奉した(一二六五年七月四)ことが見え、越前流のみならず薩摩島津で前に見た市來政家と系圖相論の當人久時も亦「一藝ある」畫番衆の一人として同親王に侍した(一二六〇年正月二十日)ことなど、忠久一門が後代までも京文化の傳統を保ち、或は猶朝廷又は權家に引縁のある者さへもあつたのでなからうかと想はしめる事實である。固より此等後年の事は直接に此處の論旨に係はらないが間接には忠久の半生の經歷と其後までも近衛家との關係を持続したこととの餘響と見られ得ないでもない。以上が即ち住吉偶會の無理なしに忠久と基通との間を説き得ると余の考へる理由である。

頼朝に重用された理由——忠久が廣言の子であるとは近世の史家の多く信ずる所であるが、同時に内侍を母とせず彼が頼朝に重く用ひられた説明となり得ない。何となれば廣言自身が重忠の妹を妻としたことは確かでなく、その外に彼が鎌倉に縁故のあつたことも知られない。しかしたとへ廣言と重忠との關係があつても忠久が比企女の子であつても、乃至彼が能員個人の近縁であつても、それだけでは猶ほも忠久が比企、安達、河越、畠山の徒を超えて重任されたと思える次第を充分に解し難いと思はれる。是實に頼朝私生兒の説が至極便利な點である。而も余は此根據なき説を避けて説明すべき途があると考へる。

(一)基通が我が門下たる忠久を頼朝に篤く紹介したのであるまいか。之を基通が未だ平氏及び義經事件のために頼朝と仲違ひとならぬ頃、即ち一一八五年十二月兼實内覽又は翌年三月同人攝政氏長者となる以前とし(或はこゝに八五年六月忠久頼朝會見の説の根據があるかも知れぬ)、もしくは基通の復任した後、即ち一一九六年十一月以後とすれば可能の事と思ひ得る。(二)之に加へて忠久は鎌倉殊

に頼朝近邊と何かの所縁があつたかも知れぬ。頼朝が在豆の時から或る京紳等と相識つて居たことは『東鑑』に明かな事實であつて、嘗て父祖以來京に往來し縁故が有つた彼の家に取つては當然の事である。鎌倉に來往し殊に朝敵時代を過ぎ終つた後には益々京との交渉を擴め、善信、親能、廣元其他の雲客を追々に關東に引いたのみならず、法皇の寵者丹後局とも文通した。二度の上洛からは愈々此關係が加はつた筈である。『尊卑分脈』一〇には頼朝の次女「蒙女御宣旨」とある程である。又彼の近侍の中にもそれぞれ京關係を保ち又は新たに作つたものがあつたらうし、大番役勤仕も亦其機會を與へたらう。就中比企氏の如きは前にいつた如く本來は京紳の出身なるべく、一女を宮仕せしめて内侍にまでなつて居る。さすれば惟宗家は『東鑑』等に傳へない何等かの縁故を關東に持つて居たが故に、御家人となり、政所の官人となり、殊に忠久は之に基通の推舉が加はつて頼朝の意を傾けたかも知れぬ。或は又忠久が古來久しく京の學者たり官人たり大いに諸國に國職を持つた大族惟宗氏に屬したことも、頼朝に對する一の引力ではなかつたらうか。(三)忠久が能員の近縁であつた事實は、忠久が既に頼朝に重んぜられた一の結果であるか、はた前から惟宗比企兩家の間に交情の在つた爲か、今では不明になつて居るが、とにかく一旦能員と近親となれば一層に頼朝に信任されたことと察せられる。此事實のみでは不充分であるが附加的事情としては幾分の力があつたらう。終りに(四)可能事と思はれるのは、忠久が一旦頼朝に仕へて後に、その庄職領知關係上のみならず、人格上特に頼朝の信頼を

引ぐに足る素質あることを認識されたのかも知れない。不幸にして今在る記録には忠久の人物性格が殆ど發露しないが、實際に聖榮のいふ通り「地頭御家人強之國」「天下に應ぜざらん遠國」に大庄の總領に近い地頭となり(圖田帳)、三國の守護となつた(東鑑一二〇三年九月四日條)といふ次第は、怪しげに頼朝の私子なるが故に幼弱乃至少壯の人を用ひたといふよりも、非凡の才幹あり京鎌倉に勢力ある成熟の人物を用ひたと見る方が遙に有理と見えるでなからうか。

頼朝傳説の動機——此傳説は最も熱心に最も久しく最も多數の人に扶育培養されて、最も細緻複雑の譚話を包容するに至つたことは繰り返して述べた所である。而して此成果を得んがためには特に便利の事情が少からず存在した。比較的遅く始まつただけに、前から承けた傳説及び覺束なき記録の興ふる材料を用ひ得る便があり、傳話製作の手術の幾分の修養を得た便があつた。之に加へて、前代から既に少くとも忠久の諸職の由來を示す目的を以て作られたと思ひ得る數箇の文書が傳はつたと推量する。たとへば山田聖榮の所謂の地頭御家人を忠久の下人とし只鯨嶋のみを除外したといふ「頼朝之繼書御判」なるものは、一一八六年四月三日から一一九七年十二月三日に至る諸下文の一つと一一九四年二月日の下文とを曲解したものに相違なく、此等が既に傳説の未だ早い第十五世紀後半に存在したことを證する。右の文書は凡て皆忠久の職權に關するもので、頼朝との血族的所縁には係はらない。後種類に屬する一一八九年頼朝假名文の如きは其後の出現であらう。又傳説を飾らんがために

は、三州の他家他處、たとへば伴、大藏、富山、長谷場、阿多等の諸家、山門院、安樂寺、新田宮、正八幡宮、臺明寺等の諸處諸社寺にも從來の眞偽相交はる文書及び記録の嶋津家が用ふべきものがあつたらう。更に文化が進歩するに伴れて、他國から吉見以下の系圖記録を得、東鑑以下の文献を得たのであらう。又信州の島津流が既に第十五世紀に源氏傳説を立てたことを知つた。以上の經驗を以てすれば此等の材料から自家の藥籠に採るべきものを多く發見したであらうと思はれる。

しかし是れは傳説を織り上げることの便宜を示すのみで、其動機を語らない。如何に知的良心の未だ低く、如何に家系を衒ふ習ひの遍ねく行はれたにもせよ、賴朝の面目と自家の源泉とを併せて讀し、前から唱へ來つた惟宗氏事實及び廣言傳説との矛盾と史的事歷の撞着とを敢て犯して、久遠時間大膽に新傳説の構作を進めたのは、抑々如何なる強力の刺戟に動かされたのであらうか。

消極的には、土佐の惟宗氏、薩州の惟宗諸氏と同様、島津家も亦支那人の後裔といはれるのを免れようとしたのであらう。第十三世紀に既に久時は蘇我大臣の、政家は宗大納言の後と稱した。鎌倉時代には國民的感情もやゝ動いて、もはや文化的外種の出たるを誇る念が消え去つたであらう。其後元寇時代、更に征韓時代に至れば猶更のことであつたらう。

されども只異血の譏を脱するのみならず積極的に武家政治の始祖を我が先人なりと唱へた動機は、必ず一般に系統の高貴を語らんとする僭上心が殊に此家において昂上した故でなければならぬ。賴朝

傳説の生まれたと見える室町時代には、南北朝に經驗した苦闘が猶ほも激烈となり、島津家が殆ど運命を賭して頑強の「國人」等と力爭した時であるから、彼等に對して血統の上からも優越を張らうとする念慮が強かつたであらう。足利氏をすら越える貴き由來を示さうとさへ欲したのであらう。次に既に三國を討ち從へて後は、隣國及び他境の列侯に對し、更に江戸時代となつては、自ら覺束なげに源氏を稱へる徳川家に對する外様の強者として血種上一段高く我が地歩を占めようとしたのであらう。かくて以上の經驗と修養と動機とを以て、藩廳も、忠誠を示す士人も、競つて傳説の長育と宣傳とに努めたことゝ想はれる。この心は更に昂ぶつて終に以仁王落胤の說をさへ唱ふるものあるに至つた。

高倉宮以仁王 (一一五一—一一八〇年)

松下氏(五)は忠久を以仁王落胤とする説は初代から在つて幕末に至り盛んに唱へられたといはれるが、初代から在つた筈がない。忠久の死後僅か四十年頃其孫久時が廣言を曾祖父と稱したのを見ても證せられる。しかし以仁王傳説の現はれた時は不明にせよ、諸傳説の中此説が最も遅く出たものでなければならぬことは、其如何にも漠然として推量の形態を脱したことがなく、遂に譚話たるの域に入つたことのなかつたのを見て明かである。母が誰であるか、丹後局であらうことを無言の中に置き、之に關する細かな話が出来る暇がなかつた。齊彬は一八五二年と一八六二年に伊地知季安をして此説

を調査せしめ、その報告が在つたに拘はらず、猶ほも久光は重野安釋をして重ねて調査せしめたが重野は遂に史證を得なかつた。かくて最後まで侯家が此説を公式に採用したことがない。此等の事實は皆此説が遅いことの證憑である。重野が藩が之を採つたといふのは、多分只一説として之を觀、必ずしも之を排斥しなかつたといふ意味であらう。同じく重野に據れば、季安のみならず栗本柳庵等も此説を容れ、西郷隆盛は調べるまでもなく勿論のことだといつたといふことである。

かやうに此説は單に王の庶子と稱するに過ぎない程に粗大のものであつたらしいが、季安は調査の末やゝ詳しい體系を之に與へた。即ち一旦齊彬の命によつて一八五七年に調査を上申したが、五年後齊彬は京の近衛家にて忠久の像といふものを覽、その原本を藏する母尾高山寺に請うて繪と由緒書とを寫さしめ、更に季安に調べしめ、一八六五年に至つて同人が再び報申した。されば彼の研究は幾分は高山寺の記録に據り、之に惟宗及び源氏傳説より得る分子を調査して新系統の説を築いたのであらう。季安の説明は島津家が採用したとも、民間に傳布せしめたとも見えず、つまり彼の一家言の姿で終つたと見える。とにかく其大要(松下三三——三六)によれば、忠久は(イ)以仁王の第三子で、母は比企尼の長女(ロ)丹後内侍であり、内侍は一六五五年二條院崩御の後(ハ)猶ほ宮に仕へて、二條帝の皇弟以仁王の幸を得て(ニ)一一六七年十二月に忠久を生んだ。實に内侍二十三歳の時である。(ニ)さらば内侍の生まれた年は一一四五年であるべきに、季安は(ホ)次の年としてある。後に内侍は(ヘ)惟宗

廣言に嫁した。忠久は一七四年八歳で仁和寺の董主(ト)隆曉に従つて學問した。(是れ王と母を同じうする守覺法親王である。『仁和寺御傳』)之から七年學んだが、一一八〇年父の王が擧兵に失敗遊ばした故に、隆曉は忠久の安全を慮つて薙髮せしめ(チ)法師房得佛と名づけ、密かに寺を出して伊豆に行き、内侍の改めて嫁いだ(リ)盛長の家に寄らしめた。賴朝は(ス)度々此家を訪うて、忠久が宮腹なるを聞いて之を寵遇した。一一八五年には(ル)重忠をして加冠せしめ、其女を與へしめた。その十月(ヲ)法皇は内々二口の刀を賴朝に送つて忠久に賜はらしめたので、賴朝は(ワ)刀名を改めて自刀を加へ三口を與へた。翌年六月忠久は九州に赴くべく發向したが、京で法皇に謁した時法皇は其(カ)故王に似たるを御覽遊ばされて、愛惜して高倉殿に抑留し給うた。賴朝は之を以ての外の事とし(ヨ)重忠をして忠久の南下を促さしめた。云々。

今試みに季安の説の諸點を検すれば、其出處を推し得べきものがある。(ロ)母を局といはずして内侍といひ(ヘ)廣言に嫁し、更に(リ)盛長に嫁し、(ル)重忠に忠久を元服せしめた等は、明かに從來の傳説を用ひ、且つ吉見系、東鑑などを參考したのであらう。従つて此中改正しない點は舊説の難を繼承した。季安は内侍をして廣言と盛長を前後二人の妻たらしめたが、舊説が盛長を犠牲として廣言と丹後とを丁寧に西に迎へ取つたのに、季安は盛長を活かす代りに廣言の餘命を扶助すべき義務を感じなかつた。(ハ)其前に内侍が二條院に仕へたこと、崩後猶ほ宮に仕へたことは『西藩野史』に據つた

のであらう。(イ)以仁王の第三子としたのは實史に王に二王子があらせられたことを知つた故であらう。しかし内侍が王の御寵を受け忠久を生んだといふのは高山寺記録によつたか、又は廣言はた頼朝が内侍に通じたといふ家傳を王に轉用し奉つたか、わからぬが、よし寺記にかゝる説があつたとしても、其れ自身既に島津方の傳説の換骨であつたかも知れぬ。(ヌ)頼朝が度々盛長の第を訪うた點は、想像よりもむしろ『東鑑』より得たのであらう。(ト)忠久が隆曉に學んだといふは、或は同書に見える頼朝の一私子が一一九二年七歳にして上洛し同僧に附いたことを利用したのであらうか、又は高山寺記に得たのであらうか。隆曉が以仁王の兄なりとは恐らくは季安獨立の研究かも知れず、何れにせよ此落胤説には好適の事實と思つたらう。(チ)得佛の號は家系には謚號としてあるのを轉じて隆曉が幼い忠久に授けたとすること、(ヲ)法皇が二刀を下し給ひて、(ワ)頼朝が借越にも刀名を變へたこと、(カ)法皇が惜んで高倉宮に抑留され、(ヨ)頼朝が御意に戻つて忠久をせき立てた等の點は、從來在つた家寶の由來の話、一一八六年西下の説、法皇及び基通の愛惜の話などを用ひて或は改め或は他を附會したものと思はれる。但し此等の高山寺記を承けたものがあるか否かは不明に屬する。

以上の點は殆ど皆季安の説の根據の弱いこと、自己の研究による獨創の結論の少いことを露出する。根本の目的が落胤説を活かさうとする先定的のものである所から、他の小點を之に迎合せんと企て、遂には附會の點をさへ或は寺記に據り或は創意を以て添加するに至つたのは學者としての季安に取つて惜むべき事である。

しかし他方彼の獨立の判斷によると思はれる(ハ)内侍の生年と(ニ)忠久の生年との二點は頗る注目すべく、最も喜ぶべき推論である。内侍が一一六七年忠久を生んだ時には二十三歳で、自分の生まれた年が一一四六年(四五年か)だとしたのは、多分其歿年を一二二七年といひ、其齡を八十二歳といふ舊説から推したのであるべく、又忠久については一二二六年歿と其時六十歳といふ一説とを取つて、之から誕生の年を推算したのであらう。其年の十二月としたのは舊説の月を用ひたのだらう。何れも舊傳説より推す所に過ぎず、何れも特に鋭い識見によつたものとは云ひ難いが、とにかく内侍については『西藩野史』の一説の一一三四年を排し、忠久については弘く信ぜられた四十九歳説を斥けて六十歳説を採り、かくて從來の忠久一生の傳話を惱ましめた幾多の難點を一掃し得たことは、季安の常識的批評眼の他に秀でたことを示證するものである。之を、母が一一三四年、子が一一七九年に生れたといふ根據なき舊説を墨守して、故さらに母娘二人の丹後局を造るものに比べれば、一見して優劣が明かであらう。又季安が雷に内侍、殊に忠久の生年の舊説に基く凡ての不合理を解消し得たのみならず、以仁王説を立つるに及んで始めて一舉にして局を内侍に復原し、其一一六五年の在京を定立し、自由に盛長と後に至つて婚したことを語り得、更に頼朝の顔上に塗りつけた汚點を拭ひ去つたことは目ざましいものである。さりながら之によつて廣言の末路は島津家傳から消え失せて、彼に關

する薩日生活の譚話を葬り、頼朝傳説の周圍に繁茂した一切の話叢を焼き盡し、從來公私に對し己れに向つて主張した所を根本から虚偽であつたと告白する結果となるべきことは、痛快といふべきか、悲惨といふべきか。

それはともあれ、かくも著大の影響を齎すべき以仁王落胤説の基礎は何であらうか。季安の説が何程高山寺の記録に依據したかは不明であるが、もし寺記に王と忠久とを結んであつたならば、同じく其根據を問はねばならぬ。

以仁王落胤説の根據——今日在る材料の中に此説の根據として用ひられたかも知れぬと想はしめ得るものが二個ある。一は上に舉げた如く『東鑑』に頼朝が常陸介藤時長の女との間に生んだ子を、政子の嫉妬によつて一一九二年七歳の時京に送つて隆曉に就いて入せしめたといふ記事である。隆曉は明かに以仁王の同母兄守覺法親王であるから、是れも前に云つた如く、從來頼朝の私子と稱した忠久を、今以仁王の子として都合よく右の記事を流用することが出来たのだらうと思はれる。勿論もしかかる轉用を實に爲したならば、之を季安又は高山寺僧の一種の知的罪過と見なければならぬ。しかし此は既に忠久を王の子と定めた後に考へたものであらう故に、むしろ枝葉の點である。

他の一材料は島津家に在る一一八五年八月十七日の頼朝下文といふものに、頼朝が「領家大夫三位家下文狀」に任せて忠久を島津庄下司職とすることである。此三位家を同じ季安は『薩藩舊記雜錄』

卷一に註して以仁王の實母高倉三位局とし、「領家基通の御母堂とは姉妹の御屬きなり」といひ、「玉葉」に三條宮の息北陸宮が入洛した記事あるを引いて、三條宮即ち以仁王であるから其母は「右の三位家か」といふ。落胤説を敷衍したと同人季安の註であることを注目せねばならぬ。固より此註は（一一五一年に以仁王を生んだ）三位局が一一八五年下文の領家大夫三位家であるといふまでであつて、季安は未だ以仁王が忠久の父なることは云つて居らぬ。されども此註を書いた時には落胤説が存在したのであるから、たとひ一文書の短註に頼朝傳説に反對して以仁王説を持ち出す場合でない故に季安が之に觸れなかつたにもせよ、後年同人が此説を調査し説明するに及んで、此下文に關する彼の見解が有力の根據を與へたのであらう。彼の心を推測すれば、領家大夫三位家が以仁王の母なる故に、我孫の忠久を下司職と定めたのであらうとすることゝ察せられる。故にもし果して此下文が季安の落胤説の根據ならば、此根據の價值は全く三位家に關する彼の見解の正否によつて定まるべきものである。此見解は二つの點から成立する。曰く以仁王の母は基通の母と姉妹である。曰く此下文の三位家即ち其人である。

一、以仁王の母は誰であるか、果して基通の母と姉妹であるか。王の母は藤原季成の女從三位成子（百練抄、一代要記、源平盛衰記、其他）、後白河院の妃として守覺法親王（一一五〇—一二〇二）、以仁王（一一五一—一八〇）、殷富門院（一一四七—一二一六）、式子、好子、休子の三内親王を生み奉つ

た(皇胤紹運録、仁和寺御傳、等)。(帝王編年記に宣陽門院をも其女とするは誤であらう、丹後局の女である)高倉三位局といふは此成子である。『玉葉』(一一八七年二月十九日)には此人の往年の叙位と今の丹後局のそれとを比較して、何れも嘆かはしい異例とし、乙は「卑賤者」、甲は「其品人不知、最下劣者歟」といつてゐる。然るに三位局の父季成は『尊卑分脈』六、『公卿補任』などを見れば基通と同じく遠く九條師輔を祖とし、師輔の九男閑院公季から四代目從二位權大納言公實の子であり、公光、公長及び三女の父である。『公卿補任』には鳥羽中宮待賢門院を季成の姉妹としてあるが、『尊卑分脈』六には彼の六姉妹及び三女子について何等の註なく、又「季成を含む」公實の諸子女と季成自身の諸子女について母の誰であるかを註しない。兼實が三位成子を最下劣と思つたのは其母の疑はしいことを指すと外に解し難い。

次に基通の母は『尊卑分脈』二に從三位大藏卿藤原忠隆(一一五〇年薨)の女であり、「六條攝政基實公北政所、攝政基通公母、猶子也」とある。此句の意義は、忠隆の猶子のことか、又は基實の父忠通(一一六四年薨)の猶子として基實に婚したことか、を定めねばならぬ。實に季成の祖公季は忠隆の祖兼通及び基通の祖兼家の弟で皆師輔の子であつたから、二家の血縁は明かであるが、其上に忠隆の女たる基通母が季成の女成子と姉妹ならんためには、基通母は季成から忠隆に猶子となつたのかと思ひ得るやうに見えるかも知れぬ。今、系を檢すれば、忠隆の子女の中に基通母と母を同じくするも

のは、平治の亂に梟されたので名高い信頼と其二弟とが在る。此三男一女の母は民部卿顯頼卿母(母は女の誤植)と註する。さて顯頼の系を『尊卑分脈』七に徴すれば、勸修寺内大臣高藤の八代孫從三位葉室中納言按察使顯隆の子正三位民部卿顯頼としてある。彼の一女從三位忠隆の室、信頼等の母とあるのが即ち基通の母をも生んだのである。且つ顯頼の他の一女は民部卿季成室とあつて、此季成こそは公光の父とある故に三位局成子の父と同人である。されば此關係より推して、基通母と成子と姉妹ならんためには、忠隆妻と季成妻とが同母にせよ異母にせよ固より姉妹として別人なる故に、忠隆妻がもと季成妻であつたのが先夫の子を携へて忠隆に入室したものとはなし得ない。又別人として忠隆が我が妻の姉姪季成の三男一女を猶子としたとも云はれぬ事情がある。同書六に季成は公光の外に一男三女があるから此中から三男一女を他に與へた筈がなく、且つ男の名は公長で、忠隆の子といふ信頼等とは名を異にする。故に余惟ふに成子と基通母とが姉妹として共に季成の女であることは疑ふに足りる。更に之を疑はしめる所以は、顯頼女を母とする忠隆四子女の中「猶子也」の句が基通母たる女の下にのみ註されることである。凡て此書に母誰女といふ時は實母を指すを常とする故に、此處の猶子の語は、此女が忠隆の猶子なるを意味せず、忠隆から基實の父忠通の養女として後に基實に婚して基通を生んだことと見るべきであらう。此外の結論を余は得難い。(忠隆の女は基實の前妻で、彼の後室が平清盛の女であることは前に見た如くである。清盛女白河殿は即ち基通の繼母に當る)。要す

るに伊地知季安の誤は、季成と忠隆との妻が姉妹なるを取り違つて姉妹關係を二妻の女子に移したのであらう。二女子は従姉妹である。

二、「領家大夫三位家」は高倉三位局と同人であるか。此句を太田亮氏の如く領家の大夫である三位と訓むべきか、又は領家たる大夫三位と解すべきか。季安の註は孰れとするか明かでない。此間は領家が誰であるか、「領家」とは本家をも含む廣義か、本所と別つ狹義か、此下文に引く領家方の下文を發した人の通稱が「大夫三位」であるか、「三位」であるか、等の諸問を含む。此等の問と此人が即ち高倉三位局であるかの問とを併せて吟味しよう。

年齢からいへば高倉局は一一四七年殷富門院、一一五〇年寺覺法親王、一一五一年以仁王を生み奉つた人であるから、假に一一五一年に二十幾歳と見て下文の時一一八五年には五十幾歳となるから、領家大夫三位と同人たり得る。然るに人名からいへば、之とは別に同じく三位で同じく成子といふ女がある。『寛卑分脈』五に良房の弟良門の後裔正二位權大納言邦綱があつて、その一女は成子「號大夫三位」、母壹岐守公俊女、六條院御乳母、參議成賴室とある。(邦綱は『山槐記除目部類』に一一六八年末權中納言に任ぜられて居り、『公卿補任』には一一八一年六十歳許で薨じ五條大納言又は十御門といつたとある)。此邦綱の女成子が即ち此下文の女であつて、又實に此人が島津庄の狹義の領家であり、その稱號は大夫三位であり、領家の大夫たる三位ではない。『平家物語』一八にも邦綱の女藤原成賴妻

を大夫三位殿と呼んで居る。(大夫とは中務省の中宮職の長官の從四位下納言であるのを見れば、多分成子は父が此職であつたことがある故に此稱を得たのであらう)。さて又此女が領家と見える證は、『近衛家文書』一二に「普賢寺殿〔基通〕御領事」と題する記録である。〔基通子〕一條院實信所從三綱行賢法眼記之」とあつて、簡要類聚鈔第一に據るといつてある。此文の「近衛殿御家領」の中に島津庄も掲げられて居る。此等の諸領について曰く「邦綱卿依年來之忠功、法性寺殿〔忠通〕御時、可被子孫相傳之旨、彼卿知行御家領、〔此二句は顛倒して寫されてある〕、光雅卿(于時辨官)奉行、被下御教書畢。仍重綱朝臣、大夫三位局、別當〔圓綱か〕、大納言典侍局、此等之子息等に分讓之處、別當、三位局は無其跡、大納言典侍依爲重衡御室家、下向西國、則爲普賢寺殿之御計、皆被下畢。大夫三位

分庄々也。故僧御房(側朱註「大僧正實信」)へ被讓渡也。但故御所〔基通か〕御妹御一腹の姫君を大納言典侍の養君に入まいらせられて典侍一期の後はその跡を有御相傳候て故御所へ御服所などの事沙汰しまいらせ給へとの事御計の處に、姫君「一向故御所の御進止成了。是則故僧御房御高運之至と其時の人口有之々々、故御所之仰也」云々。(尊卑分脈五によれば此重邦は正四位下兵部權大輔で、圓綱は興福寺三會已講であり、輔子は大納言典侍と號し從三位、安徳天皇御乳母、三位中將平重衡の室とあつて、母は成子と共同である。邦綱は此外に六男二女あるが今擧げる要がない)。(もし故御所とは基通のことならば此記録は彼の薨じた一二三三年の後である。其時は僧正實信も亦故人と

知られる。而も記者行賢は故御所の時から生きた人らしい。平重衡の西國下向とは一一八三年平家没落の時に輔子が彼に伴つたことを指す。『平家物語』一六から二〇灌頂卷に至るまで及び之に據る『源平盛衰記』三七、三八、四三から四八まで詳しい小説的な二人の末路の記事がある。之によれば重衡は一谷で捕はれたが、輔子は安徳天皇に供奉して九州に渡り、諸女が皆尼となつた時にも彼女のみの内の御乳人なれば宗盛の言によつて姿を變へなかつた。其後天皇御入水の後に捕はれて京に歸り、姉大夫三位の日野の家に留まつた。此處で奈良に送られる重衡の哀れな寸時の訪問があつた。重衡が奈良僧に渡されて斬られてから其骸を取り收めて骨を高野に埋めた。自身は建禮門院に隨つて大原の寂光院に清尼としての餘生を送つた。

今近衛文書の缺處と不明とを推量して補説せば文意は下の如きものと思はれる。——忠通(一一六四年薨)から邦綱(一一八一年薨)に近衛家領の五處の子孫相傳知行を給はつた。それは領家職であらう。とにかく忠通の家が本所權を保留したことは、基通と輔子との契約の内容と基通が祖父の他に給はつた職を處分して居る事實とを見て知られる。此五箇領と其他の近衛家領との本家職其他の優權は、一一六六年基實の薨後、後家盛子へ是は平清盛の第三女で白河殿といはれ、上に見た忠隆女の後には基實の後室となつた)が一期だけ領して基通に傳へられた。(此事を賴朝は『東鑑』一一八六年四月二十日條に基通「皆御押領」と稱し、基實が基通の弟基房に氏寺領のみを譲つたことを「其時事極無

道邪政候哉」と評して、彼の力で立てた新攝政兼實に基通家領を分ち付せられんことを法皇に内奏して居る)。さて五箇領所は邦綱から二子二女に分讓された。此時島津庄の領家職が大夫三位成子に付せられたことは一一八五年下文が其證である。分讓の後の相承は此文に不分明の箇處あれども、多分下の如きものだらう。一一八三年輔子西下以前に、基通は同腹の妹を輔子の養女として一期の後之に傳へしむべく契約した。然るに輔子は西齊し養女も早世した故に、輔子の分は基通の一圓進止となり、彼の子一乘院實信に傳へられた。その後基通は子なき三位成子及び別當の分をも皆實信に付した。成子の分の移つたのは一一八五年下文の後でなければならぬ。かくて實信は別當成子輔子二人の分を合し得た故に高連だといふのであらう。「皆被下畢」といふは記者の立場からいふ所であるから實信の名を略したのであらう。重邦に讓られた分の其後の次第を叙せぬのも亦それは實信の手に入らなかつた故に省いたのであらう。原文の缺損は第一處は「并別當御」、第二處は「早世」などであらうと見える。固より別當の分と輔子の分との本所進止に歸した時の先後は知られない。

もしも右の解釋が正しくば、島津庄の領家職は一一八五年の後何時か成子が「無其跡」歿した後に實信の手に入つたのであつて、此庄が一乘院領となる前に三位成子が一一八一年以後數年持つた時のあることがわかる。されば明かに一一八五年下文の「領家〔たる〕大夫三位家」は藤原邦綱の女三位成子であつて、藤原季成の女高倉三位成子とは全く別人であり、此點も季安が誤つたのである。即ちも

以上の推論が許さるべくば、又假りに彼下文を眞物と定めば、近衛家を本所と戴く大夫三位成子は、鳥津庄領家職の資格を以て、同様に同家の庇護を仰ぐ忠久を庄の下司職に指名し、頼朝之を安堵し、更に同年十一月十八日近衛家政所は頼朝安堵下文に任せて正式に忠久を下司に補任したのであつて、後に頼朝が忠久を庄過半の地頭としたのは此事實を基本としたのでなければならぬ。

[illegible]

(141)

後、廣言に嫁し、多分離縁されてから盛長に與へられ、此數奇の運命の波濤に身を任せて始めて後夫と共に天然の壽命を保ち得たとするものらしい。何れの傳説においても内侍は相重なる他人の情慾と自榮心との傀儡にされ畢つて居り、盛長は内侍を犯した人の誰なるかによつて自由に翻弄され活殺されて居る。

結 論

以上の長々しい談議を以て忠久の生ひ立ちに關する諸種の話柄と假説とを、其各々について發展の次第を尋ね終つたから、今は全體を總觀する立場から、成るべく重複を避けつゝ、諸説の由來と史的意義とを見直し、且つこれによる所得と史的事實とを併せ考へて、忠久の生ひ立ちを史學的問題として改造せんと試みよう。是れ此結論の目的である。されば結論の材料となるものは、傳説と係はらずに獨立に知り得べき事實のみではなく、傳説の促す研究によつて知り得べき事柄をも含む。故に史家が傳説の啓發に負ふ所が尠くない。

抑々虛説は中央の一點から命令して同一事を同時に諸人に語らしめる場合にすら矛盾を生じ遂に妄誕を暴露するに至るを免れぬことは、舊時代の露西亞、奧地利等の政府の在外使節の外交の史が度々示證する如くである。是れ實に任意の脱線を抑制する實事が存在して標準を與へないことの自然的責

罰である。まして數百年間多くの人が幼い知見と弱い良心とを以て虚榮心のみに驅られて勝手に捏造を積み重ねるにおいては、その中の同一事項を語るにすら前後左右に相撞着するやうになるべきは勿論である。島津氏の頼朝説の如きは其典型的好例である。されば藩の學者が譚叢の中から成るべく辻褄の甚だ紊れぬものを探り合はせて一の體系を造つた時にも、架空の本物を根本から抜き棄てざる以上は、その成果が局外者を服するに足らないものたること、『島津國史』からの引用の示す通りである。

但し如何に複雑な傳説といへども其微かに生れ出でた當初には幾分の根據があつたことが普通の事例である。しかし是れ亦あらゆる例の示す通り、其根據となつたものは眞正の事實ばかりであることは甚だ稀で、多くは事實の本體が忘れられて記憶に歪められたものや、既に空談として生ずれたことを久しく人が事實として信じ來つたものをも含む。此故に凡て傳話の根據が既に事實と假想、factと fancy より成つたことが殆ど例外なき普通の現象である。殊に忠久傳説の如く第十三世紀から第十九世紀までの間相次ぎて二三の話系が新陳代謝されたものにおいては、前系が古き事實と假想との基の上に作つた結果を、後系が採り入れて任意に之を改造し更に新しい假想を附加する。されば此場合我等は先づ初系の本源まで立ち還つて其處に在り得た根據の中の事實と假想とを推測的に識別するを要する。

最も早い忠久傳説の動きかけた頃に、其下地 (substratum) の中に在つた事實の明かに又は曖昧に

記憶されて居たものを假りに推定すれば、下の如きものであらう——忠久が惟宗氏と稱したこと。晩年に藤原姓を用ひたことのアつたこと。基通と或る關係のあつたこと。兵衛、衛門の尉官であつたこと。比企女が宮仕したこと。廣言といふ京紳が南三州に縁故のあつたこと。忠久が頼朝から島津庄地頭、三國守護とされたこと。能員の件に連累したこと。其他。之に反して當時一般に未だ多く知られなかつたらしい事實と見るべきは、忠久が前半生は京人であり、後代の子孫の或者までも京都と關聯を保つたこと。比企尼の諸女の一々の姻縁。比企家及び安達家の頼朝に對する關係の性質。其他の事であつたらう。次に既に事實の次第と意義とが忘れられて、假定の對象となりかけて居たものを推せば、内侍の京鎌倉における一生。廣言の京及び南國における一生。政子の名高い嫉妬心。忠久の名の由來。忠久が基通と頼朝とに信用された次第。彼が藤氏姓を冒したことのある理由。島津家紋二種と家寶數品との起原。などであつたらしい。此等のものが傳説發生の地盤となり肥料となつたと思ひ得る。

此假定の當否は如何にもせよ、其後六百年に亘つて繁衍した多くの傳説の消長を綜見すれば、それは大體四つの系統を示すに似、且つ此四系の出沒は大體四つの時階を劃するに似て居る。勿論四系四階は各々前のものを解消して之に代つたのではなく、一方には後の系統が前の、根本を棄てゝ其或分子を變形して新系の中に攝入したものがあり、他方には之と反對に猶ほ前系を把持して之に新系の

或要素を編み込んだものもある。是れ亦諸國民の多くの傳説の史に見える現象である。しかし概して言へば忠久傳説の四體系は相次ぐ四時階と相合するといつて差支ないと思ふ。

恐らく傳説の初階、初系は、當時早くも忠久の父たる人を忘れた筈がないから、之に關する傳説ではなく、むしろ忠久と近衛基通との關係を説明せんとしたものであつたらう。但し忠久の鎌倉家人としての光輝ある經歷を誇り想ふの餘、彼が成年の後まで一個の京紳として藤氏に隨從した事實を早く忘れて居たらしいことは、後の傳説の内容から推し得る所であるから、近衛家との親密を語る當初の傳説は極めて粗大なものであつたらうと察せられる。後代に第三系が出てからの基通傳説が偏へに頼朝私生兒の譚に倚つてのみ作られて居るのを見ても、右の推察が證せられると思ふ。されば後日の基通傳説は明かに頼朝傳説より早からぬものであるが、其前に少くとも基通と何かの關係があつたといふことを忘れて居なかつたとすれば、之について何かの話が語られて居たのを、頼朝傳説が取り入れて造り替へたのであらう。惜いかな今は以前の形體と其生れた時代とを尋ね得ぬ。

第二系は廣言内侍傳説であらう。其發生の次第、其頼朝說出で後に變形して攝入されたこと、其以仁王說の中にも亦幾分の地位を與へられたことは前に詳しく述べた所である。しかも時階の上にも亦第二であつたか又は第一系と同時に在つたかは、此傳説の中の父と母との二分子を別けて論すべきものである。廣言を父とする點だけをいへば、前に見た通り第十三世紀半よりやゝ後に唱へられて居

た。これから推せば、忠久の父の誰であつたかを忘却した筈がない故に、廣言説は眞實であつて當然第一系よりも早いものかも知れぬ。而も他方もし事實でなくば第一系よりは遅いと思はしむべき事情が存在する。何となれば、もし廣言が忠久と同じく近衛家の底下に在つたことの知見が未だ無かつた時があつたとすれば、島津家は薩州の惟宗諸家の系圖を識つてから後に廣言を探り來つたのであらうと察し得るからである。之に反して基通との關係は事實の根柢があるものであるから、前より之を幾分記憶して居たこととあれ、後に思ひ付くべき性質のものでない。とにかくに史證の示す所だけでは廣言を父とする説は忠久の時まで溯ることが出来ない。まして内侍を母として之を廣言に結ぶことは、何時如何にして起つたか知り難い。第十三紀世後半の系圖相論に此傳説の見えないのを觀れば、單獨の廣言説よりは遅いと考へてよからうと思はれる。故に姑く二人共同説は時間上にも亦第二階であらうと推定して置く。

第三階第三系は頼朝内侍密通を中心とする老大な譚叢である。其説としても時の次第においても第二よりは遅く第四より早いことは疑を容れないと云つてよい。第四階第四系は以仁王落胤説であるが、之は殆ど墮胎の形で死滅した。是等は皆前に縷述した如くである。

忽然として破曉し、維新啓蒙の黎明に照らされて、自他共に昨夢から醒めて新活動に身を入れ、自他共に家系の細事を忘れ、其修飾のために積み來つた過去の知的罪過を互ひに相問はず無言に寛假す

るに至つた。猶ほも往年のはかなき空譚を以て愛郷心の一基石たらしめんと夢みる人が無いではないが、島津家自身は、もはや虚託の裝飾を假るまでもなく、耀く數百年の家史と維新創業以後の上下諸人の勲功との光榮によつて國民に自然に欽仰される美むべき地位に在る。

然るに今日の昭代においても、中立の學者の多少史學的批評眼を以て忠久の起原を説くものが、多く彼を廣言と内侍との間の私生兒と見て居るは奇觀である(吉田東伍、國民大辭典、太田亮、其他)。

是れ正しく期せずして鎌倉時代の第二系傳説に還るものである。中にも『國史大辭典』と『日向國史』とは、やゝ諸文書を輯成して、(ア)忠久はかの二人の子であり、(イ)播磨少掾となり、(ウ)近衛家に仕へて(エ)島津庄地頭となり、(オ)外祖母比企尼の縁で頼朝に仕へ、(カ)建久中に三國守護となつた、といつて居る。(かく二書が一々に符合するのは一九一四年に成つた國史が基礎文書を知りながら一九〇八年の辭典の簡要をそのまゝに承けた故であらうか)。而して國史は更に「或日」として(十二年以前の『宮崎縣史』によつて)、(キ)頼朝が一一八六年八月三日庄の總郡司千葉常胤の代官の暴戾を停めて忠久を(ク)翌年九月九日又は(ケ)一一八九年又は(コ)一一九一年に守護職に補任したと附言する。而も此等の説は彌縫とはいふべきも批判的改造とはいひ難い。(ア)と(オ)とは當代の憑證を缺く。(イ)は『除目大成抄』に一一五五年としてあり其過早の故に記事の正確をすら疑ひ得る。

(エ)基通が地頭を補任したといふならば妄説となる。(キ)下文なるものは常胤代官の亂行を止めしめ

るのみで忠久を守護とすることには關はらない。常胤が郡司であつたのは庄の五箇寄郡のみで、十一年後の『圖田帳』に猶ほ彼は其地頭であり、一二四七年千葉氏に代つて、此處に地頭となつたのは島津氏でなく澁谷氏である。且つ一一八六年下文といふものは郡司代官を停めたのですらなく、常胤の「言上」した如く「下遣正道者」して「爲郡司職代官」沙汰を續くべしといふに過ぎぬ。（ク）一一八七年九月下文といふは庄に（筑紫奉行）天野遠景の使の入部を停めて、忠久が「以庄目代爲押領使致沙汰」すべしといふのである。此下文を守護職補任と稱したのは一三六二年六月に及んで貞久の書狀に始めて云ふ所で、本文に合しない言たるに過ぎない。（ケ）と（コ）とは當時の證なく只家の記録に語る所である。一一八九年二月九日下文なるものは忠久を庄地頭といひ、七月十日下文なるものは惣地頭といひ、一一九一年十二月十一日下文なるものは庄の住人が「不隨忠久下知之由有共聞、尤不當事也、慥可相從件下知」といふも、皆忠久を地頭又は守護として補任する文でない。（カ）建久年間に守護となつたといふのは多分一一九七年十二月三日の下文なるものに忠久は薩隅「兩國家人奉行人」として内裡大番役を催促し、賣買人、殺害以下の狼藉を停止すべしといひ、御家人等は「不可對捍奉行人之下知」、殺害狼藉は嚴禁なれば忠久は「宜守護國中、可令停止矣」とあるに據るのであらう。忠久の職名は只家人奉行人とあり、守護は勸詞として用ひられ、職號ではない。但し彼が奉行人としての職務は守護職のと實質相似て居るから、此時に彼は守護であつたらうとだけはいひ得る。之と似た他

例は正しく忠久の母といはれる丹後内侍の夫安達盛長其人である。『東鑑』（一一九九年七月十日、十六日、八月十八日、十月二十四日）によれば、彼は三河を「奉行國」とするもので、今彼國に強盜狼藉の件が起つた故に之を「糾斷」すべき責務の「遁避する所なき」者として一子景盛を遣はし、景盛は郎従を用ひて他人を搜索した。而して此國を「奉行」する盛長は「守護人」とも云はれて居る（同年十月二十四日條）。他の一例は上に引いた一一八七年九月九日の下文に見える天野遠景である。『東鑑』一一八六年十二月十日彼は九國の「奉行人」に任ぜられ、一一九一年正月十五日にも「鎮西奉行人」とあるが、八七年十一月五日條には「鎮西守護人」と呼ばれて居り（又右の同年下文には惣追捕使と稱せられ）、同年二月二十日には九州御家人等に鎌倉の興へた新恩及び本領安堵の下文を施行して居り、八八年二月二十一日には幕命によつて鬼界嶋を追捕すべく鎮西御家人を催したことを報じて居る。但し九州及び忠久について注意すべきことは、忠久が二國又は三國の御家人奉行として國を守護するの專任者ではなかつたことである。忠久の上に遠景が九國總守護人であるのみならず、別に遠景の補任より半年前、一一八六年六月二十一日頼朝の内奏には九州武士の「濫行を鎮め僻事を直す」とは太宰權帥藤原經房の進止に一任した。もし遠景が次に之に代つたのでなくば、同年十二月以後は御家人系統の外に在る朝官たる經房と御家人にして武職たる遠景とが相並んで全九州の警察及び行刑の權を行ひ、二人の下に忠久が二三國內に幾分の支配を行つた時があつたと見られる。（一一九五年五

月中原親能が「鎮西守護」となつた後も同様の事を云ひ得る。上に引いた一一八七年下文が果して眞ならば、それは只島津庄を遠景不入とするに過ぎない。されば忠久を二三國の守護と見ても遠景等の總守護權をこれから排除したのではない。（九州の守護成敗が頼朝以來常に特別であつたことは『東鑑』一二四四年八月二十四日及び翌年二月十六日條にも見える）。抑々頼朝自身は文治以來御家人を役して日本國を「守護」するものとして廣い警察及び行刑の權能を朝廷から默認されて居た故に、一一九九年一月頼家相續の時の朝廷宣下に「宜令彼家人郎從等、如舊奉行諸國守護者」とあるのは、頼朝時代因襲の事實を遂に公けに認識し合法化したものと見る事が出來よう。頼朝が御家人をして諸國に部分的に「糺斷」を行はせる場合、彼等をも亦守護と稱するに至つたのであるが、元來「守護」の詞は猶ほ勳詞と名詞との中間を彷徨する狀を免がれず、當初は其業に當る者を或は奉行人、或は守護人と呼び、又は國の總追捕使などいひ、勳詞に人又は使の字を結んだ形であつて、未だ守護の語が充分に職號として固定したのではなく、只頼朝の總的守護の任務を地方的に代行する奉行又は「使節」たるが如くに見られて居た時代があつたのである。従つて九州の如き重要地域には守護人の上に總守護使を置き得たのみならず、他處においても一國の奉行ではない小域小事の武官にさへ守護の語を度々用ひた。たとへば『東鑑』一一八六年十二月二十一日條には「諸國守護武士并地頭等」の句があり、翌年九月二十日院宣（十月二日條）には「在京守護武士」の語が見える。一二〇五年に至つて

さへ伊豫には三十二人の御家人が「守護沙汰」を行つて居り（閏七月二十九日）、更に三十年後さへ「男山内守護」あり（一二三四年五月十六日、三六年十月二十九日）、京の簀屋の「守護人」さへあり（一二三九年四月十三日、四〇年十一月二十九日）、其外時々罪人を預かり「守護」する例が多い。されば忠久については『圖田帳』によつて島津庄過半の地頭であつたことを知り得ると同年の一一九七年に、右の下文によつて（それが正しい文書ならば）少くとも薩隅二國の此意味の守護であつたことを推し得るといつて差支なからうけれども、此下文を以て守護職補任狀とすることの妥當は疑ひ得ると思はれる。まして日向を加へる三國に之を補任されたことをや。勿論彼が何時からか知らず三國を兼ねて守護したことは『東鑑』一二〇三年九月四日の收公の記事によつて疑なき所であるが、何時二國なり三國なりに補任されたかは證のないことである。

以上の『日向國史』の批評を括れば、其說の證し得べき點は只（ウ）京にて近衛家に仕へたこと、（オ）項の中の鎌倉に仕へたことの二つのみである。他の諸點の薄弱な所以は同じく薄弱な廣言内侍說を彌縫するためのものなる故である。此等諸點そのものはその眞偽はともかくも此傳説と運命を共にする程に之と密接の關係を持つたものでなく、且つむしろ忠久の出自よりも彼の履歷に關係あるものであるが、國史は之を以て出自說を扶ける點とするが如くである故に、やゝ此處に吟味を試みたのである。今日に至つても猶ほ史値不平等の諸材を並列することを以て史學の能事とするものなきにあら

ざる例證として敢て言を費したに過ぎぬ。

傳説及び史料の與へる諸分子の評價——忠久の生ひ立ちを有理に改造せんためには先づ傳説の内と外とに見出だし得る諸點の史學的價値の差等を考定するを要する。此第一の要件を顧慮せざる事が從來の忠久傳説を語るものゝ流弊であつた。余は拙らずも左の如く諸點を序次しようとする。一、當代又はやゝ後年の信すべき直接の材を評量して後に、最も確實と見るべき史的事實。二、直接の文證が缺けても、一より得た事實と史的事情とを比考して、確度は劣つても猶ほ史的事實と見得べきもの。以上の二は事實とすべきものであつて、何れも皆傳説以外から得る所である。次に傳説の諸分子の中で、史的事情と比較して、三、可證性の較々多きもの。四、其乏しきもの。五、全く之なきものゝ三等を別つ。

一、確實なる事實。(ア)忠久は惟宗氏であつた(三長記一九八年正月三十日、比志嶋文書一二一三年七月十日、續千載集一六、新後撰集一七、東鑑脫漏一二二七年六月十八日)。(但し三國名勝圖會一〇に引く一二一八年僧永金の鏡銘は疑はしい)。(イ)忠久は左兵衛尉(玉葉一一八〇年五月六日)、左衛門尉(三長記上出)、檢非違使で、一時は賀茂祭主を勤めた(新後撰集上出)。播磨少掾であつたことがあるかもしれぬ(除目大成抄)。(ウ)頼朝に事へて後何時か島津庄大半の地頭となり(三國圖田帳)、暫くは三國の守護を兼ねた(東鑑一二〇三年九月四日)。(エ)能員の近縁であつた(東鑑同上)。

二、幾分確實と思はれる事實。(オ)忠久の誕生は一一六五年よりやゝ前であらう(一一八〇年左兵衛尉たるより推算する。かく定むれば其他の朝職と武家諸職とが妥當の年配となる)。(カ)近衛基通の庇護を被り(京職の歴任は基通の恩顧と限らないが、少くとも島津庄の地頭となり得たのは本所から庄職を宛行はれたことを基とするであらう)、加之成人の後までも在京した貴公子であつたと思はれる(檢非違使や賀茂祭主を幼童として勤め得ぬ。御家人となつた後さへ猶ほ權門に頼つたらうことは一一九八年左衛門尉となつた時の有様によつて前項に推考した)。(キ)故に頼朝に出仕したのは比較的遅く成年の式を経過した後であらう。而して彼が比較的重く頼朝に任用されたのは基通推舉の京紳惟宗氏であること、及び恐らく他にも所縁があり、且つ能員の近縁となり、其上に人物の見るべきものがあること等の理由があつた故であらう。

三、可證の程度較々多き傳説。(ク)廣言が忠久の父なること(第十五世紀初半に記した安國寺のいふ第十三世紀後半の系圖相論がそのまゝの事實ならば、忠久死後半世紀頃に彼の父を語る所が既に架空であつたとも思ひ難いものがある)。(ケ)吉見系、比企系に記する比企尼の三女の姻縁(東鑑がやゝ之を確める)。

四、可證性の劣つた傳説。(コ)廣言が父なる上に、丹後内侍が母なること。(サ)廣言の先妻が重忠の妹であり、忠久が重忠の第六女又は他女の婿なること。(此等の點は當代の記を得ないのみなら

ず、當代及びやゝ後の史的事實から推定し得べきものを未だ發見しない。

五、可證性の全く無しと見える傳説。（シ）頼朝私生兒説と之に連なる政子、基通、廣言、重忠元服など殆ど一切の傳説。（ス）以仁王落胤説。

以上の配列を觀て頗る著しいことは、一及び二と、三から五までとが、二群を形成して其間に大きい間隙を隔てることである。甲群と乙群との差は事實と或然及び不然との別であり、踰え得べからざるものである。甲は何等話説又は家傳の文書と比較するの要なく直接又は間接に確實の文證もしくは史實より獲べき所である。之に反して乙は傳説より發して考定すべき所である。且つ之が可證の程度は傳説を史學的に評量してのみ定め得るのであつて、傳説のみによつて幾分なりとも可證的と判定し得べき點は見出だされない。さりながら繰返していひたいことは、乙群の中の序次は傳説以内にて評定し得ない所であるといへ、傳説の存在せるが故に始めて此等の考量すべき諸點を發見するのであることである。もし傳説が無かつたならば、他日或は證し得べき點の在ることを我等は悟らなかつたであらう。只その未だ證し難いものは如何に可證性の富めるものと雖、史的事實の中には入れ難いと止むを得ざる所である。

されども茲に特に注意を喚ばねばならぬ極めて肝要の事がある。以上の考定は單に諸點の史學價值（historicity）の評量に過ぎない。抑々史學の唯一健全の方法は原材料に基いて事實を追究し組織する

にあること事新しく云ふに及ばぬことである。而も正しく茲に史學の能力の制限が在る。何となれば、此勞作を親しく經驗した人の熟知するが如く、原材料の存在と其厚薄とは多くは偶然的のものであつて、これのみが究竟の憑據である以上は之によつて獲べき學問的所得は頗る危ぶむべきものである場合が甚だ多い。材料の與へる諸點の史學的優劣は其實在であつたことの可能の多少と必ずしも一致するものではない。たとへば忠久傳説の語る廣言が父なりとの説は余は之を第三位に引き下げ、内侍が母なりとの説は更に第四位に降したけれども、過去の現實においては二人は直接に兩親として余が第一位に列した諸點よりは遙に眞正自明であつたかも知れない。ましてや記録及び傳説に逸した重要な事實の未だ發見すべき術を得ないものが存在しなかつたと誰が斷じ得やうか。たとへば忠久が惟宗氏であるのは養子としてあるか、さらば彼の實家の古來の系統は如何。中にも彼の父母、殊に母は眞實に誰であつたか最も知りたい問題であるが、それは今全く知られて居ない女かも知れない。忠久は何時まで在京し何を爲て居たか。何時何故に武人生活を好んで御家人となつたか。はた頼朝に従つたことは果して純粹の武士に化し畢つたことを意味するのであらうか。能員との近縁の性質は如何。忠久の人物性格功績は如何。此等及び其他多くの點については、今は確固たる事實を得難いが、もしも之を發見し得たならば、以上の考定の次第を大いに改めて低位の點を高位に上げ高きを低くすべきものもあるべく、重要な新點を加へて忠久の出自を更に根本から改造せねばならぬこともあり得

べき道理である。是れ最も留心すべき大事であることを余は讀者に注意したい。只史家としては現存の諸點を吟味して其結果によつて築成せんとする以外の方法が在り得ない。もし或點が一片の常識から恐らく史的事實であつたらうと推し得る場合でも、何等の傍證が見えぬ以上は之を採用するを許し難く、只之を一の推量と明言して擧げ得べきのみである。且つそれも只々其點が他の史實又は史的事情との比考上、假定事として指示すべき値ある場合に限る。單に傳説が語るのみで毫も其實否を批判すべき手がりのないものは、右の如き點と全く史學的價值を異にする。かゝるものは多分架空の話であらうと見て扱ふの外に術なきものである。前者は時には可能的想像として指示しても苦しくあるまいが、後者は想像としてだに受用すべからざるものである。ましてかくも不平等の諸點を漫然と縫ひ合はせて之を「研究」と稱する如き手段は、往時ですら心ある學者の忌んだ所であり、今日ではもはや許し難いことである。

今右にいふ如き史學的約束の範圍内に姑く忠久の生ひ立ちを改造したならば、左のやうなものでなからうかと思ふ。——忠久は自他の稱した通り惟宗氏であらう。其名に忠の字が在るのもそのためであらう。父母については微すべき確證が無い。しかし其生れたのは一一六五年よりやゝ前であらう。多分とは純粹の京紳で、若い時から藤原氏殊に近衛家の所從であつて、其恩顧によつて兵衛、衛門の尉となり、檢非違使となり、一時は賀茂祭主を勤め、或は何時かは播磨掾となつた時であらう。又近

衛を仰ぐことから島津庄に重要な庄職を宛行はれ、其他にも同家及び他の高家から他の庄職を得たらう。少くも一一八〇年まで又は更に數年後在京し、然る後或る年から或る有力の所縁によつて頼朝の御家人となつた。もし基通に紹介されて鎌倉に仕へたならば、其事實は基通が頼朝の強請によつて攝政を罷めた一一八五年末以前であらう。十一年後基通復任の後とすれば遲きに失するやうである。もし傳説の如く一一八五年に頼朝に始めて見參したとすれば忠久が二十歳を踰えた頃となる。さて頼朝に歸して後に其重臣比企能員の女又は實妹と婚したかと察せられる。而して此等の緣由又は其他の理由あつて頼朝に異常に重く用ひられ、一一九七年以前に島津庄内最大の地頭とされ、一二〇三年以前に三國の守護とされた。(此年以後の忠久の御家人としての履歴は今省く)。彼はかく鎌倉御家人となつても猶ほ京都との關係を保つたらしく、左衛門尉となつたのは一一九八年初のこと、頼朝の推舉と基通などの舊縁とによるものと推し得る。子孫に至つても嫡流以外には京都關係の人があつたと見えるのは、此の如き忠久の生ひ立ちによるのであらう。但し忠久が晩年に藤原姓を冒したことのあるらしいのは、基通の猶子となつたためではなく、久しく恩顧を受けた事實を恃んだのであらう。猶ほ數代は惟宗姓を保つたのは此故と見える。

廣言を忠久の父と稱することは彼の生ける間には間接の記事だに無い所であるが、後代の追記が信ぜざれば彼の歿後半世紀程には此説があつたと見える。記事と事實との真正は疑ふことも、受ける事

も等しく難い。次に内侍が彼の母なることは、今日知る所では更に遅い傳説であるらしく、少くとも其説の史學的價值は父傳説に劣る。以仁王の落胤といふ説は最も新しく、全く證なき所である。賴朝私子傳説は之よりは遙に早く起り遙に複雑の分子を包含し、最も高聲に宣傳された所であるが、今日の批判においては全然空中の蜃氣樓と觀るべきものであると信ずる。

以上の改造論の中には、忠久の人物品性に關する點を批判の中に加へない。是れは前に云つた如く忠久の性狀と行蹟との知るべきものが殆ど無いのみならず、人の出自については成人後の性格を參考する必要があるからである。勿論、人の一生に關する研究においては、其内的特質を閑却して只其外面の經歷のみを尋ねるのは、恰もシェークスピアの作物の筆者が他人なりと論ずに當つて、其人が果して此等を作る天才が有つたかを問ふを忘れるに類する。此論文の範圍以外である忠久の武人としての履歷に至つては、他日別に之を論ずる機會があらう。